が既に述べた如く、機械が足りなかつた。これは非常に重要である、何となれば唯だ機械のみが大規模生産に小規模のそれに對する卓越を與へ、大規模のものを無條件に小規模のものよりも有利にするからである。機械は大きくなればなるほど有利である。五馬力の蒸氣機械にあつては、例へば、毎一馬力が一箇年に三五四ルーブルを要する、五〇馬力の機械にあつては毎一馬力が既に一箇年一〇五ルーブルにしか當らぬ、が三、〇〇〇馬力の機械にあつては——全部で三六ルーブルにしか過ぎない。それ故にこそ工場は小生産者を亡ぼすばかりでなく（一八六六年に吾々のところでは、ロシヤでは、九五、〇〇〇の織匠が工場で、六五、〇〇〇が家で、働いてゐた、が一八九五年には既に二四二、〇〇〇人の織匠が工場で、二〇、〇〇〇人だけが家で、働いてゐた）、同樣にまた大工場は小中企業を亡ぼすのである（一九〇四年から一九〇九年へかけてロシヤに於ける勞働者數は全部で七パーセント、が一〇〇〇以上の勞働者を有する工場の勞働者數は二〇パーセントだけ增加した、これ等の大工場によつて勞働者總數の三分の一以上——一、七八八、〇〇〇の中の六七二、〇〇〇が占められてゐた）。しかし十八世紀の大企業は（ロシヤには當時にも一〇〇〇人以上の勞働者を有する製造所があつた）手で働いてゐた、隨つてそれは必ずしも常に家內工業勞働よりも有利であるとは限らなかつた。仕上げ功程によつて受取つてゐた所の家內工業者は、仕事に對して何等の報酬も受取らなかつた所の農奴の職工よりも、より多く『努力した』。そこで當時の製造所に於て最も野蠻な刑罰が用ゐられてゐたにも拘らず、それは或る同時代者の保證する所に依れば、貴族及び地主を除き、農民達が——『この村には工場がある』と、さながら『この村には疫病がある』と言ひたげな顏をして言つてゐたほどであるが、——あらゆる慘酷に拘らず、製造所の勞働者からは依然として、家內工業者から搾ることの出來ただけの『餘剩產物』を吐出させることに成功しなかつた。十八世紀のロシヤの工場主の大部分は、或は零落れたか、或は『工場主業』の最も容易い方法に移つて、——原料を家內工業者達に分配することを始めたか、即ち買占人に變はつたかしてしまつた。

かくて最初のロシヤの製造所には（それは既に一七二五年に二百以上と計算されてゐた）機械ばかりでなく、その他にも尙ほ何か、即ち出來るだけよく働き出來るだけ多く仕上げようとすることに興味を持たされる自由勞働者が不足してゐた。吾々は、かくて、一遍に、商業資本主義と工業資本主義との間に存する根本的な矛盾に當面する。第一のものは小規模生產者の隷屬を利益とした、そしてそれ故に農奴制度を支持した、第二のものには自由勞働者が必要であつた、そしてそれ故に彼は農民の解放を達成しなければならなかつた。工業資本主義の發達は、十八世紀までの一切のロシヤの社會的及び國家的組織が據つてもつて立つてゐた所の土臺石を覆へさねばならなかつた。プロレタリアートを自分自身の墓掘人たらしめる前に、又この目的を達する爲めにも、工業資本は自から、吾々が前章の終りに於て記述した所の、ロマノフ家の國家の墓掘人とならねばならなかつた。

それは決して爾かく容易で簡單ではなかつた。商業資本主義が『終つた』そしてその場所に工業資本主義が『始まつた』と云ふやうに考へてはならない。かゝる理解は全く正しくないであらう。商業資本主義は吾々のところに工業資本主義の端初のみでなく、この最後のものが、機械と自由勞働者とを有する、成熟の形で現れるに至つた後にも、長くロシヤに存在することを續けた。それ以上に、商業資本主義は發展しつゞけた、そして完全なる自分の開花に到達したのは恰も十九世紀の後半期、その影響の下にロシヤの近代經濟史上に於ける最も注目すべき事件の一つである一八六〇―一八七〇年代の鐵道網の建設が行はれた時である。二十世紀の初めにさへも『十月黨』の如き有力なるブルジョア政黨は、主として、舊商人的商業資本を代表してゐた、それに反して工業資本の代表機關は立憲民主黨及び進步黨の兩政黨に集中されてゐた。工業資本が獲得した勝利は、商業資本との協力によつて獲られたものである、農民の『解放』(單に地主からばかりでなく、彼等自身の、農民土地の過半からも)が一八六一年に實現されたのは、唯だそれが商業資本にも有利であつたが爲めである。しかし官僚的國家を完全に清算する事はロシヤの工業的ブルジョアジーには矢張り出來なかつた、何故なら商業資本にはこの國家が必要であつたからである。そしてそれは一九一七年の二月革命まで待たねばならなかつた。工業資本主義の政治的勝利はわづかに八箇月だけプロレタリア革命を先んじたに過ぎなかつた。

商業資本主義は吾々のところでは、ノオヴゴロド・モスクワ時代に、贅澤品――高價なる毛皮、絹等、等の輸出をもつて始まつた。大衆的必需品が吾々のところで輸出され始めたのは漸くロシヤがバルチツク海に於て一列の港灣を領有するに至つた、北方戰爭以後である。それ以前には夢を、例へば、西ヨーロツパへ輸出してゐたのはダンチヒ及びケーニツヒベルグの如きバルチツクの良港を近くに控へたポーランドであつた。これ等の港灣の優れた點は、彼等が決して結氷しないことにあつた、それに反してペテルブルグ、レーウエリ、ヴイボルグ及びリガすらも一年の數箇月は氷に鎖されたまゝであつた。ロシヤの商業資本は最初からバルチツクの不凍港を唯一つだけでも領有しようと焦慮してゐた、そして北方戰爭後約四十年を經てロシヤは再び西ヨーロツパに發生した大戰爭に(主として、イギリスとフランスの間に起つたところの、しかし前者の側には、その他に、プロシヤがあり、後者の側には――オーストリヤがあつた)、所謂七年戰爭に參加した。この戰爭の目的はロシヤにとつては、その不凍港ウインダワ及びリバワと共にクルリヤンヂヤを手に入れることであつた。クルリヤンヂヤは當時、或はロシヤに、或はポーランドに從屬してゐた所の、『獨立の』國家であつた、しかしポーランドは既に、彼女を無視しても差支へないほど弱かつた、隨つてロシヤの競爭國は、主として、プロシヤであつた、これと戰端を開いたのでもある。ロシヤ軍はプロシヤの港の一つをさへ占領しようとしたほど成功した――即ちケーニツヒベルグをさへ。しかしロシヤは戰爭によつて甚だしく疲弊した、

その結果は何物も獲ずして平和を締結しなければならなかつた。

この戰爭まではロシヤはわづかに脂肪、帆柱材、麻、蠟および昔ながらの毛皮を輸出してゐた。最後の品目は、ロシヤの毛皮の富源が涸渴し、しかも市場に益ゝ豐富にアメリカの毛皮が現はれるに從つて、意義を失ひつゝあつた。蠟は當時相當多量に要求された、何故なら脂肪の蠟燭は非常に具合が惡く不潔でもあつたし、それかと言つてまだステアリン蠟燭を作ることを知らず、石油も同樣に使用することを知らなかつたから。それ故にすべての裕福なる家々、少くとも『主人方の』部屋々々には蜜蠟の蠟燭がともつてゐた。麻と帆柱材とは主としてイギリス人が買つた、概してロシヤ商品の主要なる購買者として、ロシヤの輸出貿易の全體を自分の手に握つてゐた。その彼等がロシヤ社會の上層階級のためにすべての製造品を――『イギリス製』の羅紗から書翰箋、封筒および手紙を封じる糊の末に至るまで、供給した。ロシヤの製作所の製品は大部分民間に賣り擴められ若しくは政府によつて買上げられた（例へば、羅紗は軍隊のために、帆布および太繩は艦隊のために、等、等）。初めて七年戰爭の終りに、ロシヤにとつては『麥の商賣が最も自然である』と言はれ始めた、そして初めて十九世紀の初年代から麥の輸出はロシヤの商業にとつて、それが一九一四年の戰爭まで持つてゐた如き意義を獲得し始めてゐる。麥の輸出の上に、主として、ロシヤの商業資本主義は完全に成長し發達したのである。

彼はこの場合極めて巧妙に他國の工業資本主義の發達を利用した。何故にイギリス人は一七六〇年までロシヤの麥を買はなかつたか？　然り、彼等のところでは自分のので十分であつたからである、當時のイギリスは何よりも先づ農業國であつた。しかし十八世紀の中葉にイギリスには產業革命が起こつてゐる、地主達によつて農民が土地を失はされた結果として、イギリスには多數のプロレタリアートが形成され、植民地の占領によつて、イギリスは貴重な原料（特に棉花と染料）の多數を收得し、最後に、數多くの發明（紡車、機械織機、特にワットの蒸氣機關）の結果として、イギリスは機械の國となり、そして大規模生產がイギリスに於て初めて小規模生產を凌駕してゐる。

產業的變革の影響のもとにイギリスに於ては都市的および一般に非農業的住民の驚くべき成長が始まつてゐる。住民の主たる階級がイギリスに於て農民であつた間、國の人口はその增加が緩慢であつた、一七〇〇年にはそこの人口は五百萬餘と計算されてゐた、一七五〇年には――殆どきつちり六百萬であつた。十八世紀の後半期に、今いつた、變革が起こつた、そして一八〇一年迄にイギリスには既に九百萬以上の住民があつた。世紀の前半にはイギリスの人口はかくて二〇パーセント以下、が後半には五〇パーセント以上を增加した。同じ事が十九世紀の初めにも續いた、一八〇一年から一八二〇年までの二十年間に、イギリスの人口は三分の一だけ――九百萬から千二百萬に增加した。それと同時にイギリスに於ては十八世紀の初葉に四百二十五萬の人々が農業に從事してをり、工業には二十

五萬の人々が從事してゐた、世紀の後半期に於ては農民の數は三百萬以下に減じ、勞働者の工業化は殆ど三百萬にまで上つた。[1] 成程、この期間内にイギリスの農業方面に於ても數多くの完成が仕遂げられ、機械がそこへも浸潤して行つた、隨つてイギリスの農村經濟の生産力は啻に減少しなかつたばかりでなく、却つて增加しさへもした、しかし矢張り急速に成長しつゝあつた工業民を扶養することはイギリスには出來なかつた。麥の價格がイギリスに於て急激に騰貴し始めた「一クオータア」の小麥（ロシヤの一二プード）の平均價格が十八世紀中四〇シルリングをさして出なかつたものが、十九世紀の最初の十年間には同じ一クオータアが既に七四シルリング、さらに一八一一年から一八二〇年へかけては既に八七シルリング二分の一を値した。[2] 成程、その後價格はいくらか低落した、しかし十九世紀の最後の四分の一まで彼等は依然として十八世紀に於けるよりも高値を持續してゐた。

註1　十八世紀初葉の統計は非常に正確とは認められない、しかし各階級の相互關係についての概念は與へる。

註2　シルリングは往時のロシヤの金にして——四八コペツク。

丁度また十八世紀の後半に大なる活氣がロシヤの地主達の間に始まつてゐる。彼等は、主として、農村經濟に關聯せる問題を詮議し研究する爲めのウオーリノエ・エコノミーチエスコエ・オープシチエストウオ（經濟自由研究所）を設立し、新種、施肥、等、等に關する各種の試驗を始め、外國から（その同じイギリスから）機械および機械技師、その他、等、等を取寄せてゐる。そしてウオーリノ・エコノミーエチエスコエ・オープシチエストウオ（經濟自由研究所）の『調査書』に、小麥が——最も利益の多い商品であること、及びロシヤは運命そのものによつて『ヨーロツパの穀倉』たるべく又すべての西歐諸國にとつての小麥の源泉たるべく豫定されてあることを記載し始めてゐる。すべてこれ等の現象はまた直ちにロシヤの外交政策にも反映した。小麥の爲めには南部ロシヤの諸縣の黑土帶が最もよかつた。しかしそこからバルチツク海までは非常に遠かつた、で今やロシヤは南方へ、黑海の港灣へと自分の道を拓り開くべく始めてゐる。十八世紀の後半にロシヤはトルコとの間に二回戰爭を行ひ、その結果クリミヤとオデツサ（正確に言へば、いまオデツサの在る所、何故ならオデツサはその時初めて建設されたのだから）を占領し、又黑海を地中海から分つてゐる海峽の自由航行權をトルコから獲てゐる。その爲めにロシヤが一九一四年の世界大戰に參加したとろの、海峽問題は、かくて、同樣に商業資本によつて提起されたのである。

結果はロシヤの商人とロシヤの地主との希望を理由づけた、但し彼等が期待したほど急速にではなかつた、上に述べた、一八二〇年後の麥價の下落が、或る程度までロシヤの麥の輸出の成長を抑へた。それにも拘らず『穀倉』の役割をロシヤは依然として演じてゐた。既に一八〇一年には彼女は殆ど七百萬プードの小麥を輸出した、一八二〇年にはそれが二倍にされ、一八四〇年までには殆ど三倍にされた。その後は一層足どりが早かつた、一八五〇年には二千六百萬プード、一八六〇年には四千二百

萬、一八七〇年には九千六百五十萬輸出された。十九世紀末（一八九五年）にはロシヤの小麥の海外への輸出は巨大なる數字に達した、二億三千七百萬プード。勿論、その全部がイギリスに輸出されたわけではない、ロシヤの小麥は大なる數字に於てフランスによつても、イタリーによつても、又ドイツによつてすらも要求された（最後のものへは、主として、ロシヤのライ麥が行つたのであるが、其輸出高は既に一八六〇年に於て二千萬プードに達してゐた、一八九五年にはライ麥が九千百萬プード以上輸出された）。しかし主たる購買者として長くとゞまつてゐたのは、麥との交換に、自分の工業の生產品をロシヤへ輸入してゐたところのイギリスであつた。既に一八七八年にロシヤへのイギリスの輸入額は一億五千萬戰前（一九一四年前）ルーブルに上つてゐた、がこの時までにはロシヤへの外國商品の輸入は既に工業資本の意を迎へての各種の困難にとりまかれてゐた。

最初のうちこの最後のものは、勿論、イギリスの競爭から非常な打擊を受けなければならなかつた。しかし情勢の變化はそのイギリス人自身が自分の政策によつて力强い刺戟をロシヤの工業の發達に與へるに至つた。世界第一の爲めのイギリスとフランスとの鬪爭は七年戰爭では終らなかつた。十八世紀末に、イギリスが、完全に自分の競爭者を粉碎しようとして、フランス革命を利用しようと欲した時に、それは再び勃發した。彼女は非常に欺かれた、事實はフランスは革命のために、イギリス人が期待したごとく、弱くならなかつた、却つて强くなつた、そして經濟的に成長し始めた。フランスの工業資本主義は、ナポレオン・ボナパートの帝政時代に組織化された後に、イギリスのそれと市場のための鬪爭に這入つて來た、それはイギリス人の全く豫期せざるところであつた、以前彼等の間には鬪爭は主として植民地と海洋貿易のために行はれてゐた。イギリスはフランスに對して相次いで聯合（列强の軍事同盟）を組織した、その際、イギリス人が殆ど自分の植民地のごとく見做してゐたロシヤは、勿論、すべてのこれ等の中心であつた、しかしナポレオンのフランスは長く頑强に抵抗しつゞけた。最初の二聯合（初めにロシヤとオーストリヤ、次いでロシヤとプロシヤ）は慘々に粉碎された。ナポレオンはベルリンを占領し、ウインナを占領した、そしてロシヤをして平和條約（一八〇七年、チルジツトに於て）を締結するの餘儀なきに至らしめた、この條約に基いてロシヤ皇帝アレクサンドル一世はイギリスとの同盟を破棄して、フランスと同盟を結んだ。ナポレオンは所謂『大陸封鎖』に參加すべく强要した、即ちナポレオンがすべての被征服國家から要求した所の、イギリスとの商取引を斷絶するといふ義務を負はせた。ナポレオンは此のごとき方法によつてイギリスの商品に對してヨーロッパの全大陸を封鎖して、（此處からして大陸封鎖なる名稱も出てゐるのである）、そして、言はゞイギリス人を手も足も出なくさせようと望んでゐた。

ロシヤは突然イギリスの工場の生產品に見放された、それはロシヤの貴族がかくも馴れ親しんでゐた所のものである。最後のものはチルジツトの講和に甚だ不滿であつた、絕えず低く不平を言ひ、額

越しにアレクサンドルを、その父、一部分は同様にイギリスとの國交斷絶の爲めに貴族達によつて殺害された所の（一八〇一年に、この例が何よりもイギリス人の意を强からしめた、そして彼等を思ひ切つたロシヤ利用に咬かした）、パーウエル一世の運命をもつて、威嚇した。貴族及びその背後に立てる、より以上に、勿論、イギリスとの通商禁止に不滿であつた所の商業資本は、それでも結局望みを達することに成功した、即ち一八一二年にロシヤは再びフランスと斷交した、ナポレオンの軍隊は、その最後の成功である所の、モスクワ占領の後に、ロシヤの雪の中で凍え死んだ、ナポレオンに對して新らしい、最後的の、最も恐るべき攻守同盟が形成され、そしてイギリスの工業資本主義は、遂に、完全なる勝利を占めることが出來た。しかしそれは安價には濟まなかつた、從前の地位を悉く回復することは彼は出來なかつた、そして失はれたるものの中には實に彼のロシヤに於ける地位があつた。

商業資本がすつかりチルジットの條約に悄げてゐた時（アレクサンドル一世は長いこと彼にとつて屈辱的な條約を公布する決心がつかなかつた、そしてペテルブルグの株式市場は、それを利用して、如何なる講和もまつたく締結されなかつたと信じさせてゐた）、工業資本は恰も生命の水を注がれたかの如くであつた。イギリスの競爭をまぬかれたロシヤの工場は文字通りに、茸のごとく、成長し始めた。特に紡績及び織物工場、綿織物は當時珍しかつた、そしてロシヤへは專らイギリスから輸入されてゐた。一八〇四年にこの種の工場はロシヤに一九九あつた、多くは小規模で、勞働者總數六五〇〇、生產額五百萬ルーブルを擁するに過ぎなかつた、それが十年を經過せる、一八一四年には、工場が四二三、それ等に働く勞働者が三九、〇〇〇、生產額六倍、三千萬ルーブルにまで增加した。アメリカの棉花（當時はそれより他になかつた）が非常な分量に於てロシヤへ、彼女がこの方面に於て全ヨーロッパ諸國を凌駕した程に、輸入されるに至つた、一八〇九年にはまだその輸入が五十萬フントに過ぎなかつた（この貴重品は當時プードではなくフントで目方を秤られてゐた）、然るに一八一一年には既に九百二十五萬フントの棉花がロシヤへ輸入された。すべての外國商品が狂氣的に騰貴しつゝあつた時に、棉花は却つて安くなり始めた、そしてその價格は殆ど二分の一に下落した、――それほど多量に輸入された。すべての『相當の人々』から大陸封鎖に對する不平を聞かされ、而も同時にこの繁榮を目擊したところの外國人達は、解し兼ねて肩をすぼめるのみであつた。封鎖の最中にフランス公使は自國の政府に、假令ロシヤ人は贅澤品の騰貴、ルーブル相場の下落に不平を竝べてゐるとは言へしかしロシヤの工業は發達しつゝあり、多くのラシヤ、絹織物、紡績の工場が設立され、富裕なる地主達は外國の勞働者を雇傭して、ロシヤ勞働者を敎育しつゝあると報告した。同樣に砂糖工場が設けられ、火酒工場、等、等が增加してゐる。

イギリスとの同盟が回復された時、政府は、外國商品の騰貴を絶叫し續けてゐた貴族階級に影響されて、從前の通りに、イギリス工場の生產品の殆ど自由なる輸入を許可しようとした。しかしその時

既に工場主達が絶叫し始めた、そしてそれは彼等に耳を藉さない譯には行かなかつたほど、轟々たるものであつた。彼等はアレクサンドル一世に上書を奉呈した、そして率直にイギリスは彼等にとつてナポレオンよりも惡く、イギリス商品の無條件輸入は一八一二年のモスクワ大火よりも惡いと陳述した。工業資本は既に相當に有力であつた故に、――多數の工場に貴族階級も、就中その巨大なるものが利害關係を有してゐた（ユスポフ公は、例へば、大ラシヤ工場を所有してゐた）、――彼を考慮に入れない譯にはいかなかつた。一八二二年に自國工業の『保護』の目的をもつて外國商品に對して高い稅が課せられた。その時以來『保護』政策は曾てロシヤの政府によつて全く廢された事が無く、時には唯だ多少弱められるに過ぎなかつた（一八五七年と一八七七年の間がさうであつた、その原因を吾々は以下に見るであらう）。

イギリス商品の輸入はまつたく杜絶したわけではなかつた、――高價な品物を買ふことの出來た者は、依然としてイギリス品を使用した、――しかし甚だしく局限されてゐた。一八二二年の輸入稅以前にはイギリスは毎年ロシヤへ三百萬ステリングだけ輸入してゐた、それが一八三一年には二百萬以下となり、しかもこの輸入の殆んど三分の二は精製品でなく、單糸（カタイト）であつた、それはロシヤ內地のロシヤの工場によつての仕上げにかけられねばならず、即ち、かくして再びイギリス人との競爭に役立つものであつた。一方關稅の壁に圍まれたロシヤの工業は、意外に急速に發展した。一八二四―一八二六年にはロシヤへは平均、一年に七萬四千プードの棉花と三十三萬七千プードの單糸が輸入されてゐた、が一八四八―一八五〇年には既に原綿が百二十五萬プード以上、しかしその代はりに單糸（カタイト）は二十八萬一千プードに過ぎなかつた。原綿の輸入の激增は、單糸（カタイト）の輸入の減少と竝んで、どの程度までロシヤの織物工場の獨自性が成長したかを示すものである。以前ロシヤの更紗工場主はイギリスの單糸（カタイト）なしには濟ますことが出來なかつた、今やロシヤには自國の紡績工場が出現しつゝあり、そしてそれは以前に織物工場がさうであつたと同じ急速度をもつて、成長しつゝある。一八四三年にはロシヤにはかゝる工場が四〇あつた、そしてそれ等に於ては三十五萬錘までが運轉してゐた、が一八五三年には運轉錘數が既に一百萬以上に達した。世紀の終り（一八九一年）にはロシヤは錘數に於て既にイギリスに次で西ヨーロツパに於て第一位を占めてゐた（イギリスに於ては四千四百萬錘、ロシヤに於ては六百萬錘、フランスに於ては五百萬を越えること少々、ドイツに於ては五百萬錘、オーストリヤに於ては二百萬錘、等、等）。

ロシヤの工業の急速な進步は吾々の內國市場の發達を追越すに至つた。農奴制度下の農民はすべての『餘剩』を主人に取上げられてゐた故に、この農民は、實は、乞食であつた。それはどんな購買者であつたか？　ロシヤ工場の生產品の購買者は、主として、都市の住民であつた、しかしその成長は農民を農村に縛り付けてゐたその同じ農奴制度のお蔭で、甚だ遲々たるものであつた。ロシヤの都市

人口は十八世紀に於て全人口の四パーセント、十九世紀前半に於ては六パーセント餘をなしてゐたに過ぎなかつた。簡單な結論はそこで再び農民を解放することであつた。主人の搾取をまぬがれて、賃銀を持つことになる結果、農民は急に『購買者』に變ずる、――一八六一年後の工業資本の歴史は事實それを證明した。しかし商業資本は尙ほ自分の犧牲と手を切ることを欲しなかつた。麥價は當時上げどまりであつた、地主及び商人は、當時のロシヤ勞働者の（實際、當時のドイツ勞働者よりも多くの賃銀を取つてゐたところの）高い賃銀を見て、この賃銀が甚だしく彼等の利潤を少くするであらうことを恐れた。ロシヤに於ける高い勞働賃銀が――又しても農奴制度の結果であることを彼等は夢想だもしなかつた、雇傭勞働者の大部分はオブロークを背負はされて手放された農民であつた、隨つて彼等の賃銀には、彼等自身の生活を維持する爲めに必要なる金以外に、尙ほ彼等が自分達の主人に支拂はねばならなかつたところのオブローク（年貢）も含まれてゐた。工場主はこの場合勤勞階級の搾取に關する自分の先輩よりもより賢こくより打算的であつた、地主及び商人よりもより賢こかつた。工場主は自由雇傭勞働者を、その高銀にかゝはらず、恐れなかつた。既に一八二五年には吾々の工場の勞働者の半數は自由雇傭者であつた。三十年代には工場主は自分の農奴勞働者をも解放し始めた、そして四十年代にはこれ等の、所謂『ポセツシオンヌイ（隷屬的）』職工の大部分が自由民であつた。しかし地主は自分の恐怖と分れることが出來なかつた、で歴史が彼を壁へ壓付けるといふことが必要であつた。

農奴制度が存する限り、國内市場の擴大は不可能であつた、即ち外國市場を探すしかなかつた。以前多くの者にはかう思はれてゐた、ニコライ一世、『ニコライ・パルキン』の帝國は、その厖大なる陸軍と、兵營と、笞刑と、新兵徴募期と、軍服の崇拜と、到る所における軍人の支配と共に、――即ちこの帝國は、ブルジョアジーにとつて、凡そ想像し得る限りに於ての反對である、と。事實に於ては、兵營は工場に對する必要缺くべからざる補充であつた、ニコライ・パルキンは、この皇帝の參事院の證據立てるところによれば、『武裝されたる手をもつてロシヤの商業の爲めに東方への新らしき道を拓いた。』正にこのゆゑに全ロシヤは軍服を着せられたのである！　そしてニコライが同樣の熱心さをもつて自分の軍隊の檢閲とロシヤの商品の工業博覽會とを主催し、幼年學校と技藝學校とを設立し、演習とニジエゴロドの年市とへ行幸したのも偶然でない。最初彼の事業は進捗した、彼の最初の、ベルシヤ及びトルコとの二回の戰爭は、勝利とこれ等の兩老國をしてその國境を廣くロシヤの商品の爲めに開かしめた平和條約とをもつて局を結んだ。ベルシヤの市場を完全に支配することに成功した。ロシヤの工場主がそこでは帝王であつた、ロシヤのチエルウオネツツが通貨であつた、ロシヤの商慣習が――標準であつた、外國人――イギリス人、ドイツ人――は事々に聞かされた、『ロシヤ人はかうしてゐる、ロシヤとの取引ではかうなつてゐる。』

既にこのことも外國人には――第一には同じイギリス人に――愉快であることは出來なかつた。イギリス商品の大部分の爲めのロシヤ自身の國境の閉鎖は尙ほ一層イギリス人を怒らせた筈であつた。がロシヤ人がトルコやペルシヤに滿足せずして、中央アジア及びアフガニスタンへ、インドの國境へと進出し始めた時、イギリス人はまつたく不安になつた、そして空氣中に戰爭の氣が立ちこめた。ニコライが傍若無人に激烈に振舞ひ、自分の侵略的な計畫を隱さうともしなかつた所から、――ロシヤが自分の工業の爲めに東方市場を獨占（專ら自分自身のものとなす）しようとしてゐることが明白であつた所から、イギリス人にとつては同盟者を見出すことが困難でなかつた。東方貿易には彼等と共に、例へば、フランス人も亦利害關係を有してゐた。その上商業資本も、ニコライ一世を名指して阿諛的にある商人の演說の中で語られた言葉を借用するなら、『スタンブールとテーランとを震撼しつゝある右手』の貢獻を利用することを辭さなかつた。ドウナイ流域の諸國――ハンガリア、モルダヴイヤ、ワラヒヤ、ドウナイ下流のルーマニヤ等の港灣を經由しての麥貿易は、見よ、オデツサとタガンローグの麥貿易を壓迫し、これと競爭をなしつゝあつた。これは如何にしても許すことが出來なかつた、ニージニイ（下）・ドウナイをも掌握することが必要であつた。ニコライは一八四九年にハンガリアへその地の革命を鎭壓するといふ口實のものとに出掛けた、しかしそこに留まることは出來なかつた。が一八五三年にロシヤ軍隊はモルダヴイヤとワラヒヤ（現今のルーマニヤ）を占領した。これがトルコとの戰爭の原因となり、かつドウナイ流域の通商の自由に利害關係を有せるオーストリアをロシヤの敵の陣營に投げ込んだ。

露土戰爭は初めはニコライの爲めに好都合に進んだ、ロシヤの黑海艦隊はシノープのトルコ艦隊を殲滅した、ロシヤ軍はドウナイを渡河した。ニコライはコンスタンチノープルの占領を空想した。ロシヤの商業及び工業資本は、同盟して、東方一帶の主人となるべく期してゐた。これは、勿論、イギリスも、フランスも、オーストリアも忍ぶことが出來なかつた。イギリス及フランスの艦隊は黑海に這入つた、オーストリアは自分の軍隊を動員した。ニコライはイギリス人とフランス人に宣戰した、しかし同じことをオーストリアに對してもする決心はつかなかつた、――その者は『武裝的中立』に停まつてゐたから。とは言へドウナイの對岸のロシヤ軍の軍事行動は中止されねばならなかつた、背面にオーストリア軍を有して前進することは危險であつた。海上に於てはロシヤ艦隊は到る所英佛の聯合艦隊の前に退却しなければならなかつた、それは比較にならないほどロシヤのそれよりも優勢であり優良であつた（大部分は蒸氣船であつた、が吾々のは帆船であつた）。英佛軍はロシヤの海岸に、クリミヤに上陸した、そして十一箇月の包圍の後に黑海における主要なるロシヤの軍港、黑海艦隊の根據地なるセワストーポリを占領した、その際艦隊は全部擊沈された。

ニコライは失敗に堪へ得なかつた、そして毒を仰いだ、が彼の息子にして相續者なるアレクサンド

ル二世は、それによつてロシヤが黑海において艦隊を擁する權利を失つたところの平和（パリー條約、一八五六年）を締結しなければならなかつた。ロシヤの資本主義はトルコに於て主人となる希望を放棄しなければならなかつた。外國市場の探求は畫餅に歸した、否でも應でも內國市場を擴張しなければならぬこととなつた。この時までには地主達の大部分も（大多數ではないにしても）自由勞働者に對する自分の恐怖を拂ひ落してゐた。貴族社會の政論家達は自由雇傭勞働がどれほど賦役勞働よりも有利であるかを算定し始めさへした。西ヨーロッパに於ける麥の價格は、四十年代の終りに、再び『强含みになつた』そして商業資本は、舌舐めずりをしながら、如何なる小麥の大量が新たに建設された鐵道によつて最も僻陬の黑土諸縣からバルチック海及び黑海の港々へ殺到するであらうかを空想してゐた。鐵道網の建設案は既に一八三〇年代に出來てゐた、而もそれをニコライの宮廷に有力なる庇護者を大藏大臣カンクリンに於て見出してゐたところの、工業資本が齒止めしてゐたのである。最後の者は種々なる取留めの無い口實のもとに、――恰も鐵道は住民の裡に放浪性を發達せしむる、等、等、――これが建設を妨げてゐた、實は工業資本が、鐵道を利用して外國商品が餘りにも容易にロシヤ內地に入り込むであらうことを恐れてゐたのである。今や、否應なしにこの領域に於ても讓步しなければならないことになり、――即ち一八五七年にイギリス及びフランスの意を迎へて關稅を引下げなければならなくなつた以上、――この心配も自然なくなつたわけである、要するに、農奴制度の廢止に對する障害は二〇年前に比すれば今や比較にならないほど無力なるものであつた。

勿論、商業資本とその同盟者なる主人・農奴所有者が、まつたく降參してロシヤの工業の足許にひれ伏すであらうと考へることは甚だ以て無邪氣であらう。ブルジョア歷史が『二月十九日の大改革』なる響高いタイトルを附して粉飾したところの取引においては（この日、舊曆による一八六一年二月十九日に、農民の解放についての宣言書が署名された、しかしそれが公布されたのは漸く三月五日であつた、二月十九日が大精進の前週の一日に當つてゐたので、解放された國民が酒に醉拂つて『暴動を起こす』のを怖れたのである、かくの如きが『解放する者』の解放される者についての觀念であつた！）舊主人達の取りまへとしては、勿論、最大にして最良の部分が當てられた、が工業的ブルジョアジーは彼女にとつて全く必要であつただけ、多少それよりもすくなくさへ受取つたに過ぎなかつた。何よりも先づ商業資本は依然として、それに慣れて來たところの、小獨立生產者を保存した、農民は土地を附して解放された、そしてこの土地に定着させられた、彼は『ミル（村落自治團體）』の同意なくしては農村を去ることが出來なかつた、農村の住民が租稅の（吾々が次ぎに見るであらう如く、二月十九日以後非常に增加したところの）納付に關して連帶保證によつて結合されてゐたところから、彼（ミル）にとつての全利益は農民を手放さないことであつた、何故ならさうでなければ後に殘つた者達の各々がより多く出さねばならぬこととなるから。この『土地を附しての解放』は恰も農民

にとつての最大の幸福なるかのやうに叫ばれた、そしてこの欺瞞が或る種の、非常に賢こい、しかし經濟問題に經驗のない人々を迷はした、――例へば、有名な作家ゲルツェンの如き（これに就いては尙ほ下に述べる所があるであらう）。實際には解放などはどんなのもなかつた、自分の小さい哀れな土地に縛り付けられて、農民は土地爭議裁定官としての貴族階級の權力の下に留まつた、この者の命令によつて、まつたく裁定官の頤使に甘んじてゐた郡の『裁判所』が『解放されたる者』を農奴時代に於ける如く鞭で打ち据ゑることが出來た。

が重要なことは、商業資本が農民から『餘剩產物』を搾出しつゝあつたその機構を保存したことであり、却つてそれを完全なものにしたことである。以前には各個々の地主がこの產物を農民から賦役勞働として、又は貢賦金として、搾つてゐた、今やこれを全貴族階級國家が租稅といふものの助けをかりて爲し始めたのである。初めから地主は、勿論、農民を無償で解放しようとは考へてゐなかつた。凡ての十字街で、農民の人格に對しては如何なる賠償も主人に豫定されてゐないと叫ばれたが、しかしこゝでも、他のすべてに於けると同樣に『大改革』は嘘をついたのである。事實は地主達は農民から八億ルーブル以上を（一八六一年のルーブルは一九一四年のルーブルよりも一倍半大きかつた）、元來が農民共有地であつたところの土地に對する賠償の形式において受取つた。この土地は最初から農民によつて農耕されたものであり、地主は曾て一度もそれを利用したことがなかつた、彼にとつてはそれは唯だ農奴の勞働力を維持する手段であるに過ぎなかつた。土地に對する賠償が正にこれ等の農業勞働力の買戻しであつたことは、全く明かである。尙ほ一層明かな事はこの土地がその實際の價格よりも遙かに高く評價せられたことである、それは當時、その當時の價格によれば、六億四千八百萬を値した。然るにそれに對して農民は八億六千七百萬を拂つたのである。地主達はこれ等の金を一時に政府から受取つた、が農民は期限を定めて政府に分納しなければならなかつた、これが有名な賠償金なるものであつたのである。政府自身それが地代よりも、殊に非黑土地帶において、高かつたことを認めてゐる、例へばモスクワ縣に於て農民に『讓渡された』土地の一デシヤチンは二六ルーブルであつた、がそれに對して農民は五一ルーブル三三コペツク拂つた。處によつては（北部の、オロネツカヤ縣の如き）賠償金が農民共有地の地代よりも四倍乃至五倍高かつた。しかし、賠償金の他に『解放』後人頭稅が增加され、その上『大改革』後に創設された地方官廳の維持がこれ亦殆どまつたく農民の負擔するところとなつた。結局解放後十五箇年を經て農民は國庫に自分の土地の地代よりも最低二〇パーセント、非常に屢〻二倍若しくは三倍（二七〇％まで）多く支拂つた。換言すれば、納稅だけに農民は全部の自分の麥を賣つて、その上に尙ほ副業によつて不足を補はねばならなかつた。租稅は彼から餘剩產物を、貢賦金及び賦役勞働にすこしも劣らず、搾り出した。こゝに『土地を附しての農民の解放』の秘密があつたのである。

しかし『二月十九日の大改革』によつて收奪された農民は依然としてプロレタリアにはならなかつた。プロレタリアは――彼の勞働に對する需用がある所へ流れ行く所の自由勞働者である、が農民は自分の農村に定着させられ、爭議裁定官（後の――地方長官）としての貴族警察の監督の下に停まつてゐた。工業資本主義のために必要な『勞働豫備隊』は吾々のところでは一時に、農奴制度の沒落と共に創造されないで、徐々にそして困難に、それによつてこの沒落が起こつたところの、それ等の條件に反して、集結されなければならなかつた。同時に收奪されたる農民は迚も急にはロシヤの工場、特に織物工場が必要とした有利購買者にはならなかつた。解放後の最初の數年間は吾々の工業は進歩せずして退歩さへした。しかし時の經過と共に歪はこゝでも正された。一八六一年よりも前に改革の必要を唱導した貴族政論家の豫言の一つが、完全に的中した、自由勞働は比較にならないほど農奴のそれよりも生産的である事が解つた。解放前（四十年代の末）四種の主要なる麥（小麥、裸麥、大麥および燕麥）の産額が全ロシヤを通じ僅に二千八百――二千九百萬チエトウエルチに過ぎなかつたものが、解放後の、一八七〇年代には――三億以上になつた。農業經濟の生産力のこの高まりは漸次に國民大衆の購買力をも引上げた。小停滯の後に工業、特に機織工業は急速に進歩した。一八六一年には吾々の機織工場の全部をもつて二百五十萬プード餘の棉花を加工した、が一八八一年には彼等は既に九百萬プード、一八九一年――一千五十萬プード、一九〇一年――千六百萬プード以上を加工した（最高點に達したのは一九一〇年で、當時二千二百萬プードの棉花が彼等によつて加工された）。それと同時に農民解放前のロシヤは一、〇〇〇露里以下の鐵道を有してゐた、然るに七十年代の初には吾々のところには既に一〇、〇〇〇露里以上の鐵道があつた、八十年代の初めには――二一、〇〇〇露里以上、九十年代の初めには――二七、〇〇〇露里まで。鐵道網の成長と平行してロシヤの冶金工業も成長した（それはこれ等の鐵道に、主として、レールを供給した、機關車その他は尙ほ長く主として外國から購入された）。一八六一年には吾々のところで二千萬プード以下の鑄鐵が鎔かされた、一八九一年には――既に六千一百萬プード、が一九〇一年には――既に一億七千三百プード。この年に吾々の冶金工業は既に西ヨーロツパの二三の大國を凌駕した、例へば、フランスを、丁度これより十年前にロシヤがフランスを紡績生産の領域に於て追ひ越したやうに。

第二十世紀にはロシヤは既に全く決定的にまた明白に、發達せる工業資本主義の一國として、足を踏み入れた。

第九章　農奴制國家

工業資本主義の勝利に拘らず、國家組織は十九世紀の終りまで、ロシヤに於ては、商業資本が自分の要求の爲めにそれを創設した如きその如きもので留まつてゐた。

皇帝は『自分の國家の第一流の商人』であることをやめた、そして宮廷では最早獸脂や麻について話されずに、普通の宮廷の會話が行はれた、しかし『ロマノフ家』[1]はそれにも拘らず、富の大蓄積者として停まつてゐた。自分の資本を彼等は、勿論、公表しなかつた、しかし執拗な風說は彼等に十九世紀の末に純粹に貨幣のみにて七億ルーブル（金）を歸してゐた。一八八〇年代にアレクサンドル三世が西ヨーロッパの一銀行より他へ三億ルーブルを移したことは、確かなることとして知られてゐる（『ロマノフ家』は自分の金を全部、勿論、外國銀行へ預けてゐた――安全の爲めに）。その他、皇室には莫大なる不動產が屬してゐた、所謂『皇族地』乃至『御料地』領地である、そこには金坑も、工場も、葡萄園も、その他、等々、等々、凡そ當時のルーブルでさへも十億以上あつた。今日の紙幣にするなら『ロマノフ家』には、確かに、五千餘億あつた。『自分の國家の第一の商人』が世界一の億萬長者に變じた。

註1　ロマノフ家に括弧をしなければならない理由は、既に簡單に觸れて置いた如く、この一族は最初の『全ロシヤ皇帝』ピヨートル・アレクセーエヰツチの息女をもつて絕えてゐるからである。エリザウエタ・ペトローヴナには子供がなかつた、で彼女は自分の相續者として自分の甥ピヨートル、ホルスタイン・ゴトリンスキイ公を指名した。これにも同樣に子供がなかつた、彼の相續者、パーウエル・ペトローウイツチは、當時すべてのものが知つてゐた如く、彼の妻と宮內官吏の一人との間に生れたのである。このパーウエルから後の『ロマノフ家』は出てゐるのである。

彼の側近者達はロシヤにおいて第一流の富豪であり、全世界に於ても遙かに最後のものではなかつた。農民の貢賦金及び賦役勞働は凡そ一〇〇―一五〇年前には主としてパリーにおいて浪費された、そしてそこで『ロシヤ貴族』は諺に變じた。當時すでに廣大なる植民地を收奪しつゝあつたイギリス及びオランダを除いては、恐らくヨーロッパ大陸にはロシヤに於いて見られた以上の巨富は存しなかつたであらう。彼等の中の最も舊きものはすでにピヨートル以前の時代へ、第十七世紀へ溯る。ストロガーノフ家は當時すでに百萬長者であつた、ピヨートルの御代に彼等は一二〇、〇〇〇の農奴を所有してゐた、男子のみを數へたものである故に、それは二千五百萬の住民に相當した、要するに――完き王國である、ピヨートルの御代に最も富裕なる人間となつたのは彼のフェヴオリツト[1]なる『アレクサーシカ』メンシコフである、小工匠の息子からロシヤ軍の總指揮官、公爵閣下、『イジール侯』となつたところの。彼のところでは九萬人の農奴と、その他に、千四百萬（當時の）ルーブルに相當す

る現金と貴金屬とが數へられた。エリザウエタ・ペトロヴナの御代には彼女のフェヴオリツトの一族――ラズウモフスキイ家――は一二〇、〇〇〇人の農奴を所有してゐた。二治世を經て、エカテリナ二世の御代には主なる彼女のフェヴオリツト――ポチョームキン――の財産は當時の金で五千萬ルーブルと評價された（それは今日數百億を下らない）。このエカテリナと彼女の第一の、時間的に言つて、フェヴオリツト、オルロフとによる子孫、――ボブリンスキー伯爵家は最近までロシヤに於ける最も富める人々の中に屬してゐた。懷中は皇帝の肉體を樂しませた人々のところに於てのみならず、同樣にまた皇帝の靈魂について心を勞した人々のところでも、賑んでゐた、尤もこのもの達はより少く受取つてはゐたが。皇室の懺悔僧はいづれも皆金滿家であつた、例へば、ロマノフ家の最後の皇帝であるばかりでなく、また最も淫蕩な――エリザウエタ・ペトローヴナの懺悔僧ドウビヤンスキイのところには、八、〇〇〇人の農奴があつた。

註1　フェヴオリツト（『情人』）――肉體的に皇帝に近かつた人々を指示する爲めに、禮儀深い歴史家によつてロシヤ語に入れられた外國語。ビヨートルに對する斯くの如き近接關係に、當時の一般の意見によれば、メンシコフも亦立つてゐたのである。しかしより屢〻、勿論、フェヴオリツトは帝位にあるものから見ての異性であつた、吾々のところでは、十八世紀に於て、殆ど專ら婦人が帝位にあつたところから、フェヴオリツトは多く男子であつた。

皇帝附の懺悔聽聞僧の仕事も亦すくなくなかつたことを言ふ必要がある。『最も敬虔なる、獨裁的なる』ロシヤの皇帝達が身につけてゐた程の罪惡を一人の人間の上に見出すことは、恐らく重罪人監獄の刑事部に於てのみ可能であつたであらう。屢〻愚昧なそして無智な（十八世紀の女帝の全部が完全に讀書きが出來たわけではなかつた）、私利を謀るに汲々たる奴僕の群に圍繞され、自身權力と金錢とに飽くことを知らない彼等は、抑制を知らなかつた。彼等のどんな言葉でもが法律であつた、何人も抗辯することを敢へてしなかつた。古代の、ロマノフ家以前のルスは皇帝にとつても義務的であつたところの習慣を知つてゐた、商業資本はそれ等の習慣を根こぎにした後に、唯一つの掟『欺かないでは――賣らない』だけを憶えてゐた。虚僞と欺瞞とが當時の商業の本質をなしてゐた、虚僞と欺瞞とが十八世紀及び十九世初めのロシヤの『上流』社會の本質であつた。紳士は、貴族出のものですら、宮廷を疫病のやうに怖れて逃げ廻つた。お追從の歴史家達によつて『大帝』と呼ばれたビヨートルは、以前エストニヤの一牧師（リユーテル派の宣教師）の下婢であつたエカテリナと結婚する爲めに、妻を修道院に押込めた。息子のアレクセイを自から折檻し、その後ひそかにペトロパウロフスク要塞の陰砲臺で刑戮せしめた。如何に彼が暴動を鎭壓したかを吾々はすでに語つた。彼は黴毒の結果死んだ（一七二五年）、前以つて自分の第二の妻にもうつして、その者は彼よりも二年生き延びただけであつた。尤も、彼女の早い死の原因が――黴毒であつたかそれとも酒精中毒であつたか、はつきり言ふことは困難である、帝位に攀じ登つた後、自分の名を署名する事も出來なかつたこの昔の下婢は、終日

及び夜の大部分を酒瓶のうしろで送つた。彼女に代つたピョートルの孫（彼によつて處刑された皇太子アレクセイの息子）は天然痘で十五歳で死んだ、そしてそれ故に一つの罪惡をも犯す暇がなかつた。彼の相續者なる、ピョートルの姪、アンナは、豫め用意された宮廷官吏と共に、彼女がクルリヤンヂヤ侯なる夫の死後やもめ暮しをしてゐたクルリヤンヂヤから到着した、そして自分と共に外國人の情人、ビロンなるものを連れて來た、この者は馬丁から最初伯爵に任ぜられ、次いでアンナが皇帝となつた時に、クルリヤンヂヤ侯にも列せられた。彼及び彼の同志は被征服國のごとくロシヤを掠奪した。かくまでに慘酷に租稅が徵收されたことは曾てなかつた、怠納者は『窮命』させられた、即ち雷帝の時代に劣らず、支拂ふまで、笞打たれた。『ビロン主義』なる名稱は幾代の間か恐怖をもつて迎へられた。それと共に、イギリス公使の談話によれば（イギリス人は理解し得べき原因により、ロシヤにおいて行はれてゐたことを注意深く觀察してゐた）、『ロシヤの宮廷が當代に於て如何なる壯麗さに達したかは、想像の外であつた、國庫に一文の錢もなく、それ故に何人にも何も支拂つてゐないに拘らず……。女帝の全意識は如何なる財寶と名譽とを伯爵ビロンに惠むべきかについての滿足と配慮に充たされてゐる』。

アンナは自分の相續者として幼い甥のイワン・アントーノヰッチを、まだその者が生まれもしない中にさへ、選定した。しかしビロンの一派は彼女の死後間もなく内訌を起した。それに乘じて、ピョートルの息女、エリザウエタが、近衛の一中隊の助力を得て、まだ這ひ々々してゐた幼帝を廢して、そして自から帝位に即いた。しかしその以前に、かくも簡單に問題が片付くとは思へなかつたので、彼女はフランス及びスウエーデンと同盟を結んだ、後者は當時ロシヤと交戰中であつた、そしてエリザウエタは、援助に對して、ビョートルが彼等から奪つた所のものをスウエーデンに返還すべきことを約束した。スウエーデン人の援助が必要でなくなつた時、エリザウエタは無遠慮に彼等を欺いた。これは、吾々が既に述べたごとく、ロマノフ家の中でも最も淫奔なる女であつた。彼女の『寵臣』は無數であつた、フランス公使シエタルヂーから幼年學校生徒に至るまで、苟もこの『職務』につかざるは無かつた。主としてはウクライナ人の宮廷歌手、ラズウモフスキイであつた。自分の女官達を彼女は陛下の不名譽な噂を傳へたといふ理由で、廣場に引出して笞打ち、彼等の舌を引拔くことを命じた。彼女には一五、〇〇〇枚の着物があつて、そして彼女が死んだ時、國庫には一枚の銀貨すら無かつた、軍隊には銅貨で俸給が支拂はれた、しかもそれは大砲を鑄直したものであつた。

エリザウエタも亦帝位を甥である、ホルシユタイン侯のビョートルに讓つた、そしてこの者が彼女の死後に皇帝ビョートル三世となつたのである。しかし彼はホンの數箇月帝位に即いてゐたに過ぎなかつた。これは愚劣な、下士官の惡癖をもつた、醉漢であつた。彼の妻は極めて狡猾なそして野心滿滿たる、ドイツの低い家柄の王族出の、陰謀家で、エリザウエタが彼女の從順と溫順とを見込んで、

甥の妻に迎へたのである。彼女は、實際、謙遜と忠誠とを裝つてゐた、同時にロシヤ軍隊の機密を賣り（七年戰爭當時）、その上、既にエリザウエタと共謀して、自分の夫を、その出生に彼が全然無關係であつたところの相續者を押付けて、欺いた。彼女の子供の父親の後にも尙ほフエヴオリツト（情人）は數人かはつた。エリザウエタが死んだ時、彼女のもとにこの職務にあつたものは近衛隊にあつて大なる勢力と大なる影響とを持つてゐたところの、機敏なそして大膽な近衛士官のオルロフであつた。ビヨートル三世は、ホルシユタイン侯として、デンマルクと爭つた、そしてロシヤ皇帝としての自分の地位を利用して、隣人に復讐せんと思ひ立つた。しかしロシヤの近衛隊は全然ホルシユタインの利益のために血を流すことを欲しなかつた、オルロフ一族（彼等は全家族近衛隊に勤務してゐた）はこれを利用した。ビヨートルは醉拂つて、また何が何だか解らない裡に、早くも廢されてそして捕縛された、そして彼の妻が女帝エカテリナ二世となつた（第一世は上に述べたビヨートルの妻であつた）。

廢されたビヨートルは直ちにロプシで殺された。オルロフ一族には模倣者があり得た、しかし不利益な『繼承者』（競爭者）からは遁げ出さなければならなかつた。如何にエカテリナが用意周到であつたかは、十五年後に無名のドン・コサツクが、ビヨートル三世の名を僭して、ロシヤの全版圖の半ばを叛亂に卷き込むことさへ出來たのに見ても解る。しかしそのあとに直ぐもう一人の繼承者の事を思ひ出さなければならなかつた、まだシユリセリブルクの要塞内に、牢獄のなかで成長した不幸なイワン・アントーノヰツチが生きてゐた。一人の近衛士官、ミローヰツチなる者が、彼に對してオルロフの役割を演じようと考へついた。イワンは直ちに殺害された、そしてミローヰツチは捕へられ處刑された。幾つかの死骸を跨いで――その中の一つは彼女の夫の死骸であつた――帝位に即いた後、エカテリナは『光輝燦然たる』統治を始めた。彼女はすべての自分の先行者達よりも利巧でもあつたし教育もあつた、當時のヨーロツパの偉大なる學者及び文學者（ヴオルテール、デイデロー）と文通をなし、文明の擁護者と見做されることに努め、且つそれを可成りに手際よくやつてのけた。しかし淫蕩の點では彼女は殆どエリザウエタ自身をすら凌いでゐた。彼女には同時に數人のフエヴオリツトがあつた、一人は主なる者で、他は二次的な者達である。ポチヨームキンが主たる者であつた時には、彼自身が二次的な者達を選定しさへした。彼女は六十七歳で死んだ、そして最後の日まで彼女の側近には若い士官のズーボフが奉仕してゐた。死ぬ前に彼女は自分の息子のパーウエルから帝位を奪はうと欲した、その者を彼女は憎んでゐた、そしてその者は彼女を我慢出來なかつた、しかしそれを爲す暇がなかつた、遽かに死んでしまつた。

エカテリナ二世は、貴族・ブルジヨア社會の絕大の尊敬に圍繞されて、死んだ、そして『エカテリナ時代』の記憶はこの社會によつて神聖に保存された。市街の名――エカテリノスラフ、エカテリノダール、學校の名稱（エカテリニンスキイ專門學校）、それ等は今日に至るまで日常の會話に於て使

用されつゝあるが、同様に尙ほ依然として何故か立つてゐるところの、ピテール及びその他の場所のエカテリナの爲めの記念碑――すべてこれが彼女を回想せしむべく續けてゐる。如何してこの如き光榮が淫蕩にして罪深き婦人に獲られたのであるか？　勿論、彼女がフランス語の本を讀むことが出來、文學者と話すことが出來たからではない。皇帝達の運命は彼等の個人的な資質によつてではなく、彼等の行動が資本主義的・農奴制國家を創造したその勢力に必要であつたか又は有益であつたかによつて決定された。吾々は既にエカテリナが、黑海の北岸を占領して、ロシヤの小麥の爲めに西ヨーロッパへの道を拓き、黑土帶諸縣の莊園的經濟の發展に大なる刺戟を與へたのを見た。しかしロシヤの商業資本に對する彼女の貢献はそれのみでなかつた。彼女は所謂ポーランド分割に關係して、バルチック海から黑海に到るまでの全ロシヤ平原を一つの國家の境界内に統一した。

ポーランド王國は、吾々が記憶してゐる如く、同様に商業資本主義によつて創造された、しかし『ロシヤ帝國』よりも前に、從つてその時代は疾うに過ぎ去つて了つたところの國家の一つであつた。嘗て、十六世紀に、イワン雷帝の時代に、ポーランドはモスクワの競爭者であつた、ドニエプルの全流域をその手に握つてゐた、そしてバルチックの沿岸からモスクワの軍隊を追拂つた。十七世紀のコサックの革命が彼女に最初の打擊を與へた、ドニエプルがキエフと共にモスクワの手に移つた。ピョートルはリガを取つた、ポーランド・リトワ王國の東部地方からの他の出口――西ドヴィナ――も同様にロシヤの手に歸した。このことの後に、これ等の東部地方（リトワ、白ロシヤ及びポーランド領として殘つてゐたウクライナの一部――即ち後ちのウイテブスカヤ、モギレフスカヤ、ミンスカヤ、コヴエンスカヤ、グロドネンスカヤ、ウイレンスカヤ、ウオルインスカヤ及びポドーリリスカヤ諸縣）は經濟的にワルシヤワにではなく、モスクワ及びペテルブルグに依據するに至つた、通商路が決定的意義を持つてゐたところの商業資本主義の時代であつたことを忘れてはならぬ。

これ等の全地域のピョートルの後繼者達の政治的權力の下への移り行きは單に時間の問題であつた。が東部のみでなく、ポーランドの西部地方も殆ど同様の從屬的な狀態にあつた、唯だロシヤに對してではなく、プロシヤに對して。吾々はそこからも海への出口は他國の港灣――ダンチヒ及びケーニツヒベルグによる以外になかつたことを記憶してゐる。第一のものは名義上はポーランド領ではあつたが、實際にはそれはドイツの都市であつた、『自由市』（即ち獨立の共和國）であり、勿論、より多くプロシヤに依據してゐた、が第二のものは全然プロシヤ人に屬してゐた。ポーランド貴族は十八世紀の初めからポーランドよりも强かつたところの隣國へのこの自分の從屬を自覺してゐた。ポーランド王は當時相續的でなく、――貴族會議がそれを選擧してゐた、最初、プロシヤに對抗する意味での支柱を見出す爲めに、東ゲルマニヤに於てプロシヤ王に次いでの最有力なる君主、サクソニヤのクルフユルスト（公）を選んだ。七年戰爭にサクソニヤがプロシヤ軍隊によつて蹂躙されをはつた時、

彼等はロシヤに駈けつけて、エカテリナ二世のフェヴオリツトの一人である、スタニスラフ・ポニヤトフスキイを選擧した。しかしポーランド王のロシヤ女帝に對する個人的な親密はなんの役にも立たなかつた。プロシヤがエカテリナにポーランドを分割すべく提議した時、エカテリナは喜んでこの計畫に應じた、一商業資本の（ロシヤの）の手にヨーロツパの全東半部を收め得べき機會を取り遁がす事は餘りにも馬鹿げた事であつた。ポーランドの東部地方の住民はロシヤ人であつた。ポーランド人はそこでは唯だ地主と官吏とであつて、彼等にはロシヤの官憲は最初手を觸れなかつた（尤も、ロシヤに反抗した者達の領地は沒收された、これ等の領地からエカテリナのフェヴオリツト達は自分達の持參金を受取つたのである）、――要するに、こゝでは力强い抵抗には出會はなかつた、殆ど戰はずして降服した。住民の悉くがポーランド人であつたところの西部に於ては、そんな譯にいかなかつた。そこではプロシヤ軍及び彼等を助けたロシヤ軍は猛烈な抵抗に打突つた。これが新らしい戰爭と新らしい分割とに導いた、ポーランド王國が獨立國として存在することを全く止めて終ふまで（即ち一七九五年まで、分割が始まつたのは一七七二年である、それ故に分割前のポーランドを決定せんと欲する場合は、一七七二年の國境について語らねばならぬ）。ロシヤの軍隊によつてこゝで多くの慘酷が行はれた、その殘忍さに於てブラーガ（ウイスナ河の右岸にあるワルシヤワの郊外）の突擊は比較を絶した。この時以來ポーランド人のロシヤ人に對する憎惡が始まつた。しかしこれ等の分割によつてより多く利益したものは、完全にダンチヒを手に入れ、ポーランドの首都ワルシヤワをも手に入れたところのプロシヤ、及びガリシヤを獲たオーストリアであつた。ロシヤは唯だウクライナ及び白ロシヤ諸縣に、吾々が見た如く、既に久しい以前に彼女が手を伸ばしてゐたところの、クルリヤンヂヤを加へたに過ぎなかつた。

若しこれ等すべてに、エカテリナが帝國の內部に於ても商業資本にとつてかくも必要であつたところの農奴制度を、廣さに於ても、また深さに於ても、一意擴張に努めたことを、――即ち農奴からの愁訴歎願を受付けることを禁じて、地主達の權力を殆ど無限なものにし、以前には農民の地主への隷屬が大ロシヤに於ける如く甚だしくなかつたところのウクライナ諸縣に農奴制度を導き入れ、最後に、地主達にとつて極めて危險であつたプガチョフの叛亂（これに就きては後章を參照せよ）を鎭定したことを附加へるなら、吾々は何故に貴族階級竝びにブルジョアジーが、一切の彼女の罪惡に拘らず、彼女を愛したかを理解し得るであらう。そして又吾々は同樣彼女の息子の運命をも理解し得るであらう。パーウエル・ペトローキツチは自分の母親が我慢出來なかつた、彼には廷臣及び地主の社會が彼女を愛してゐるのが甚だしく氣に入らなかつた、從つて彼は地主達とエカテリナの廷臣達を我慢出來なかつた。彼は精神病者であつた、强迫觀念に惱まされてゐた、彼には到る所に陰謀と革命とがあるやうな氣がされた（惡いことには、それは丁度ヨーロツパのすべての君主達を冷汗を催させるまでに

驚かしたところの、フランス大革命の當時であつた)、自然、彼はその陰謀家と革命家とを彼が我慢出來なかつた所の人々の裡に見出した。彼は數千名の士官を勤務から黜けた、數百の貴族を『疑はしき者』としてシベリヤへ追放した、エカテリナによつて廢された貴族の體刑を復活した、彼に革命的であると思はれた言葉を使ふことさへ禁じた。例へば、彼は『代表者』なる言葉が我慢出來なかつた、或る時彼は自分の馬車からこの言葉を發する事を敢へてした一人の侍從を突出した。フランス風に着物を着ることが嚴禁された、何故ならフランスには革命があつたから。自分の生涯の終りに近く彼は自分の爲めに、ベルテブルグの眞ん中に、壕をもつて繞らされた要害の城を築造した、そしてそこに、さながら包圍された要塞内に於けるごとく、住んでゐた。

すべてこれはピヨートル三世が經驗したと同じ運命に陷いることを彼に妨げなかつた、彼はこの自分の城の中で近衛の士官達によつて殺された(一八〇一年三月十一日)。しかしこの運命が彼を捉へたのは彼の狂暴の爲めではなかつた、彼の末つ子である、ニコライ一世は、吾々が見るであらう如く、決してより殘酷でなくはなかつた、廷臣の中の一人も彼の生命に危害を加へようと考へた者はなかつたのである。しかしバーウエルは、それに加へて、貴族階級と商業資本の利益にとつて有害なる政治を行つた。それは麥の外國貿易の初まりと賦役勞働の驚くべき發達の時代であつた、地主は奴隷農民から出來るだけ多くの『餘剩產物』を搾り出さうと努めてゐた。バーウエルは賦役勞働を制限する事を思ひ付いた、農奴を一週に三日以上働かしむることを禁ずる勅命を發布した。ポーランド分割が商業資本に有益であつたことを吾々は見た、バーウエルはポーランド人に恩惠を施し始めた、監禁されてゐた最後のポーランド戰爭の英雄コスチユシカを自由にした、がプラーガを攻略した將軍スウオーロフを退けた。すべてこれを彼は一切の打算なしに、單に自分の狂暴にまかせて爲したのである、しかしすべてこれによつて彼は自分の周圍からロシヤの社會の支配階級を遠ぞけてしまつた。しかし完全にこれ等の階級をして彼に反抗せしめたのは、彼の外交政策である。最初彼はおとなしくイギリスから舵をとられて歩いてゐた、彼女と同盟して革命フランスと戰つた、これは彼に愉快であつた、何故なら彼は革命を怖れてゐたから、そしてそれは經濟的に正にイギリスと密接な關係にあつたところのロシヤの貴族階級にとつて當然のことであつた(前章參照)。この爲めに再び復職させなければならなかつたところのスウオーロフは、數度の勝利を獲た、然るに突然バーウエルは、全く個人的な原因から、自分の同盟者と喧嘩をした、そしてイギリスとの同盟をフランスとの同盟に變へてしまつた。ロシヤの港灣はイギリス商船の爲めに閉鎖された、そしてフランスとの交通が始まつた。このことは甚だしくロシヤの上流社會を憤激せしめた、陰謀が、言はゞ獨り手に、出來上がつたほどであつた、そしてその際その主謀者となつた者はパーウエルの實子にして、エカテリナの愛孫、それ故に彼の父からは甚だしく愛されなかつたところの、アレクサンドルであつた。

そしてこの皇帝アレクサンドル一世（追從者達によつて『祝福されたる』と綽名されたところの）は一個の死骸を跨いで、しかもそれは生みの父親の死骸を跨いで帝位に即いた。子殺しと夫殺しの後にロシヤの王座には正に父殺しも亦現はれて然るべきであつた。父の例に驚かされたアレクサンドルは、少くともそれが可能であつた限りは、イギリスとの同盟を持續した。フランスとの同盟を餘儀なくせしめたのは悲しい必然であつて、隨つて彼はそれから脱却する可能が現はれるや否や、身を翻すことに腐心した（上記參照）。彼は貴族階級に百方おもねつた、百方彼等の御機嫌をとつた、特に彼をより多く自主的にしたところの、ナポレオンに對する戰勝までは。要するに、自分の治世の前半期に於ては彼はエカテリナを模倣する事に、序に、文明の庇護に於ても、努力した（彼の時代に大學が――ペテルブルグ、ハリコフ及びカンザに立てられた、ロシヤに於ける最初の大學、モスクワ大學は、既にエリザウエタ・ペトローヴナ時代に創立されたのである）。

輝かしい戰勝が（ロシヤの軍隊は二回、一八一四年と一八一五年に、パリに入城した）彼を眩惑した。彼は自分をすべてのヨーロッパの君主達の統領のごとく感じ始めた、同時代者が正當にも『僞善と專制の同盟』と名付けたところの『神聖同盟』を組織した、それはさながら一般的な平和の維持に貢獻すべきであつたやうに見えた、が事實は革命との鬪爭のための警察的武器であつた。全部の時をアレクサンドルは自分の軍隊に獻げた、プーシュキンが彼を名付けたごとく、益々『王冠を戴ける兵士』に變つて行きながら。國家の首班には彼は眞正の、王冠を戴かざる兵士――アラクチエーエフを据ゑた。アラクチエーエフと共に彼は有名なる『屯田兵制』を思ひ付いた、先づもつて數十萬の國有地（農奴に非ざる）農民を一人殘らず永代兵士たらしめた後に。それは一擧にして軍隊を安價ならしめもした、何故なら兵士兼農民は自分で自分を扶養したから、又特殊の、他の一切の社會から切り離されたところの、そして常に皇帝のその內外のすべての敵に對する指揮命令の中にあつたところの、軍隊を正に創造すべき筈であつた。農民はこの軍隊的懲役に行くことを嫌がつた、反抗した、反抗は最も殘酷な手段で彈壓された、數千の農民が笞打たれ、數百の農民は責め殺された。この時にアレクサンドルが自分の有名な言葉を吐いたのである、『屯田兵制は存するであらう、ペテルブルグからチュードウオまでの道を悉く死骸をもつて鋪裝することにならうとも』（ノオヴゴロドスカヤ縣の村、――そこから屯田兵の植民線は始まつてゐた）。

ヨーロッパに於ける第一位についての同じ配慮がアレクサンドルを西方へのその後の進出にも導いた。ナポレオンに對する戰勝の後に、彼は、報酬として、分割によつてプロシヤ領となり、更にナポレオンによつて、彼が一八〇六年にプロシヤ軍を粉碎した時に、獨立の『ワルシヤワ侯國』にされたところの（正にアレクサンドルに對する遠慮からナポレオンは『ポーランド王國』の名稱を復活しなかつたのである）、そのポーランドの部分を、自分に要求した。エカテリナ二世の獲得物に反して、ポ

ーランドのこの部分（ウイスラ河中流）は經濟的に見てロシヤには全く必要でなかつた。それどころか、それはロシヤの工業資本主義の發達を壓迫するものでさへあつた、より發達せるポーランドの工業は大ロシヤのそれを壓倒した、そして殆ど十九世紀の終りにモスクワ及びヴラヂミルの工場主達が悲鳴と共に、彼等をロドヂヤの工場から防禦せんことを要求したほどであつた。しかしそれはアレクサンドルに用兵上から（軍事的見地よりして）必要であつた。楔形にゲルマニヤに割込ませることによつて、ベルリン及びウインナからの數個の通過地點にロシヤの軍隊を駐屯させることによつて、『ポーランド國家』はロシヤの皇帝を全中部ヨーロツパの主人となし、プロシヤ王及びオーストリア皇帝をその下に從屬せしめた。夫故にアレクサンドルは出來るだけ堅固にウイスラ河岸に腰を据ゑようと努め、且つ以前ロシヤの貴族階級におもねつた如く、百方ポーランド人の御機嫌をとつた。『ワルシヤワ侯國』は幾つかのロシヤの縣にならなかつた、が特殊の君主國（外國語ではそれは『王國』と飜譯された）となつた、特別の統治、特別の軍隊を持つた、唯だ君主はこの特殊の帝國と舊いロシヤの帝國とに一人――アレクサンドルあるのみであつた。尙ほ一層新らしい臣民を自分に惹き付ける爲めに、アレクサンドルは『ポーランド帝國』に憲法を與へた、即ち貴族會議による自分の權力の制限に同意した。制限は、勿論、文書の上にとゞまつた、實際にはアレクサンドルは絶えずポーランド憲法を破つてゐた、しかしポーランド人がこれを理解すまでには可成り多くの時が經過しなければならなかつた。その間に新『國王』の權力は深い根をおろして終つた。その上ロシヤに於ける如き醜惡にまでは、專横はポーランド帝國に於てアレクサンドル時代には曾て達したことがなかつた、彼の相續者なるニコライ一世に至つて初めてポーランドとロシヤの制度は平等にされた。

ヨーロツパに對する支配權についてこのアレクサンドルの焦躁は痛くロシヤの貴族階級とブルジョアジーとを憤慨せしあた。憤慨は特にアレクサンドルのポーランド政策によつて强められた。彼はポーランドに惚れたのだ、そしてロシヤを憎んでゐると言はれ始めた。ペテルブルグの商業區の商人すらも、若しポーランドに憲法を與へたのなら、それをロシヤにも與へることが必要であると論じ始めた。ロシヤ士官の間にはアレクサンドルの殺害について話されたほどの憎惡があつた。このことは大いに彼の治世の晩年に於ける『十二月黨員の陰謀』なる名の下に有名な軍隊内の密約の成立に預つて力があつた、それは一八二五年の十二月十四日に爆發したのであるが、しかしそれが始まつたのは一八二一年で、更にその準備は尙ほ早く一八一六―一八一七年からであつた。[1] アレクサンドルは陰謀の公然たる爆發までは生きてゐなかつた、彼は一八二五年の十一月十九日に死んだ。

註1　十二月黨員の陰謀の詳細については以下、『革命的ブルジョアジー』の章を參照。

彼の後を繼いだのは彼の弟、吾々が一部分既に知つてゐるニコライ・パーヴロヰツチであつた。彼はアレクサンドルの過失を理解した、そして外交政策をロシヤの工業及び商業資本に必要であつたと

ころの方向へ轉換した、『武裝された手をもつてロシヤの商業の爲に近東に於て道を拓り開き』始め、一八三〇―一八三一年のポーランドの革命の失敗に乘じて、ポーランドをロシヤと同じものにし、そして西ヨーロッパの問題には全く干渉をしないことにした、縱ひ彼の手は一八三〇年のフランス革命をも壓潰したく甚だむづ痒かつたとは言へ（所謂、フランスに於てナポレオン沒落後かの地に於て擡頭せる地主的アリストクラシーの政權を倒して、大工場主と銀行家に政權を握らしめたところの『七月革命』、彼等の統治が一八四八年の新らしい革命に導いたのである）。屯田兵制も彼は同樣に最早擴張しなかつた。そしてアラクチエーエフを解職した、しかしアラクチエーエフ的秩序は全く手を觸れられずに殘つた。何故さうなつたか、それについて既に上に述べた（前章參照）。

ニコライの治世は過渡的な治世であつた。工業資本主義は既に現存した、そして商業資本主義と政權を爭つてゐた、しかし最後のものは今のところまだ、秘密の免罪符をもつて自分の競爭者を買收することを努めて、一歩も明かなる讓歩を肯じなかつたほど、力强かつた。買收の最も露骨な方法としては、既に述べたところの外交政策がそれであつた。しかし工業資本には啻に新市場が必要であつたばかりではなかつた。彼には、第一に、自由勞働者が必要であつた、が第二に、彼には『教養ある智識者』が必要であつた、これ等の勞働者を管理し、產業を組織しそしてそれを指導する爲めに、インテリゲンチヤが必要であつた。ニコライ時代に吾々のところには工藝學校が創立され、教授科目の基礎を數學、物理、自然科學に置いた『實科』中學、商業學校が起こり、その教師を外國の大學に於て養成することによつて、大學教育を改善しようとする試みがなされた、これは一部分成功した。一八四〇年代はモスクワ大學にとつて光輝ある時代であつた。しかもそれと共に主要なる地位が、誰にも必要でない所の古代語、主として、ラテン語を基礎としてゐたところの古典中學に附與された。生徒から有能な官吏を養成し（これが爲めに上級に於て法律學が教授された）、そして彼等の頭に『正教と獨裁と國民性』に對する忠誠を叩き込まうと努めた。外國の大學で教育された教授達を嚴重に監視した、アレクサンドル・マケドンスキイについて、又タメルランについての最も罪の無い公開講演の許可が最大の困難をもつて得られた、言ふまでもなく、一切のかくの如き講演が殆ど革命的事件となつたからである。檢閲官の許可なしには何事をも印刷することが出來なかつた。それは作家達をして『イソップ的』の言葉を使はしめ、讀者に半言葉で理解し行間を讀むことを教へた。オーストリアの大藏大臣ブルックに關する論文が書かれた、がすべてのものはそれはロシヤの大藏大臣ブロックのことであるのを知つてゐた。勿論、農民の解放について何等かの意見を發表しようなどとは考へることさへ不可能であつた、單に農奴制度と言ふことさへも出來なかつた、その代りに『責任利息』といふ言葉が用ゐられた、そして論文は『ロシヤに於ける麥價動搖の原因について』といふ表題にされた。すべてのものがその中には農奴制度以外の何物についても語られてゐないことを知つてゐた。

農奴制度についてはニコライ一世も亦最も骨を折つた、しかし何よりもそれが外部に漏れてそして先づ地主達に、次いでは農民自身に知れることを恐れて、密かに骨を折つた。自分の統治の最初の年に、一八二六年に、彼は相次いで農民問題に關する委員會を召集してゐる、そしてこれ等の委員會は全部秘密會であつた。自分の書齋で彼はそつと自分の側近者に戸棚を指し示した、『こゝに――と彼は言つた、――それをもつて私が奴隷廢止の方法を立てようとしてゐる書類があります。』しかし彼の側近者――それも最も信用のあつた――以外には誰一人この戸棚を見たものが無かつた。たつた一度彼はこの問題について『秘密に』スモレンスクの地主達と話さうと決心した、しかし反對されたので、恐怖して自分の意見を引込めてしまつた。概して言へばその性格によつてこの『鐵のごとき』君主、『騎士なる皇帝』は甚だ――『羊の仲間では若者、しかし若者に會へば自分が羊』といふ諺を想起せしむるものがあつた。農民問題に關する彼の骨折りからは、勿論、何物も生れなかつた、唯だ地主達に農民の人格に對する支配權だけを放棄せしめて、全然彼等を解放しないことを許したところの、『契約』農民に關する法律が生れたばかりであつた。『契約』農民は家畜のごとく個々に賣拂はれることが出來なかつた、彼等を瓦と交換し、擅に邸宅に引上げることが出來なかつた、しかし彼等は依然として主人の爲めに働き、彼に年貢を納めなければならなかつた、いづれも定められたる（地主自身によつて定められたる）限度に於て。一と口に言つて、すべての常識を持つた地主は正にこの法律が彼に許可したそのことをなしつゝあつたのである、そのまゝでも誰も彼に爲すことを妨げなかつたことを、紙の上に確める爲めに、暇を潰して事務局へ出頭しようと思ふ者があるであらうか？　それは足で歩き、口で喰ふことを許可する法律を發布するのと同じであつた。この新らしい法律の『恩惠』に浴さうと望んだ者が殆ど無く、ニコライの二三の側近者達が、奴隷根性から、自分の農奴を契約農民に移しただけであつたことは當然である、農民はこの恩惠に對して全然無關心であつた。

然らば、何故にニコライはその重要性を理解してゐたところのこの問題に於て徒に足踏みをしてゐたのであるか？　勿論、彼に強い性格が缺けてゐたからのみではない。吾々はかしこ、經濟的條件が解放を要求してゐた所に於ては、工場に於ける奴隷職工の場合のごとく、解放が何等の困難なしに又秘密委員會に於ける七十七回に亙る問題の審議なしに行はれたことを知つてゐる。ニコライの性格が情勢を規定したのではなくして、情勢が彼自身及び彼を圍繞する全社會の性質を規定したのである。過渡期的な情勢、既に扉を叩きつゝあつた新しきものと、頑强に開けることを拒んでゐた舊きものとの鬪爭が、當時のすべての『爲政者』をして、或ることを考へ且つ語り、他のことを爲しつゝあつた過渡期的の存在たらしめたのである。それは當時の上流社會に於ける僞善の驚くべき發達を促した。

僞善はニコライの社會を上から下まで浸滲してゐた。ニコライ自身の僞善は次ぎの一事に完全に具體現されてゐる、シベリヤに於て久しく全縣下を戰慄せしめてゐた强盜團が捕縛された時に、縣知事

は彼等を死刑に處すべきことを上申した。ニコライは知事の上申書にかう書いた、『ロシヤには、神の惠みによつて、死刑が存しない、そして朕はそを復活すべきでない、されど强盜の各〻には一二、〇〇〇笞づゝを與へねばならぬ。』この場合すべては虛僞であつた。第一に、死刑はロシヤに、軍法會議、最高法院、等々の宣告によつて存在したし、ニコライは自分の治世を『十二月黨員』の五人の首領に對する死刑宣告の署名をもつて始めたのである、が、第二に、三、〇〇〇笞以上は何人も、最も强健な人間も堪へることは出來なかつた、――一二、〇〇〇は刑の終る遙か前に必然的に死ぬることを意味した(この場合には車につけて運び既に死骸を笞で打つてゐた)。僞善によつて彼の私生活全部も貫かれてゐた。彼は、勿論、彼の先輩達と同樣に淫蕩であつた。彼には常にフェヴオリツトがあつた、それと彼の法律上の妻、アレクサンドラ・フョードロヴナは非常に仲が好かつた、――それほどそれは自然なことに思はれてゐた。しかし、その外にも、彼には宮廷附の貴婦人及び未婚の處女(女官)、バレーの踊り子、等、等より成る全きハレムがあつてその御用を便じてゐた。夫及び父達は、疫病のごとく、ニコライの宮廷を恐れてゐた、詩人プーシユキンは美しき妻を持ち同時に宮廷附の人々の仲間に屬する不幸を持つた人々の爲めに仕組まれた所の戰慄すべき環境の犧牲となつた。しかも、かくの如き環境を創造したニコライが人々の前では最も愼み深い家長のごとく振舞つてゐた。人々の前では彼は最も恭々しい態度で自分の『法律上の妻』に對し、また最もやさしい家庭の父親として、朝のコーヒー、夜のお茶の時に、クリスマスの時に、又はその他の時に、『家庭の幸福』の喜劇の幾場面を演じた。彼の奴僕達はその後老年に及んで感激をもつてこれ等の情景を思ひ出した、それは彼等の生涯に於ける『最も明るい思ひ出』であつた。この僞善を彼は最後まで持ちこたへた、死の前に懺悔をし聖秘禮を受けた後に、彼の部屋へは最早フェヴオリツトは入れられなかつた、そこへ通ることの出來たのは唯だ皇后だけであつた。

彼の全生活を浸潤してゐたこの僞善が、何よりも先づニコライ時代を爾かく重苦しく壓迫的なものにしてゐたのである。遂にはニコライは、彼の秩序のお蔭で肥え太つた人々にさへ嫌はれた。富裕な地主にして請負人[1]なるコシエレフは自分の手記の中で、セワストーポリ戰役の當時彼及び彼の知己達が、戰敗がいづれにしてもニコライの統治に終焉を告げしめるであらうことを期待して、ロシヤ軍の敗退をそれほど悲しまなかつたと語つてゐる。富裕なブルジョアをさへ敵にしてゐた統治が如何なるものであつたかは想像に難くない！　ニコライが死んだ時、改革の必要をすべてのものが、彼の側近の助力者達までも、感じてゐた。彼の最も忠實な下男の一人である公爵オルロフは、恐怖に震へながら、農民問題の委員會の議長席についた、そしてこの問題の最も小さな進展の度毎に彼が恐怖にかられてアレクサンドル二世のところに駈付けてその前でヒステリーを演じたに拘らず、改革は矢張り行はれた、そして農民は商業資本が許容した範圍内に於て解放された。農奴制度の沒落の經濟的原因及び結

果を吾々は見た、だからそれには立戻らぬであらう。しかし問題は經濟的方面にのみ局限されることは出來なかつた、經濟的變革は自餘の變革の一系列を齎らした。農奴制國家、即ち商業資本の創造物はそれ自身に於て支配の一體系であつた。農奴制度なる――礎石が引拔かれ若しくは、少くとも、强く搖り動かされた以上、全建物は必ずやぐらつき且つ龜裂を生じなければならなかつた。

註1　請負人とは、吾々が記憶してゐる如く、任意の縣に於けるウオツトカの販賣を『請負ひ』、即ちウオツトカに對する稅の全額を政府に支拂つて、そしてその代りに莫大の利潤を收めつゝ國民を醉はしめる權利を獲てゐたところのそれ等の資本家達をいふ。

農奴制度は獨立の小生產者の、彼をしてその餘剩（時としては必要缺くべからざるものまでも）產物を差出させる爲めの、『超經濟的强制』の最も主要な方法たるに過ぎなかつた。しかし吾々は既に他の方法をも、例へば、租稅のごときを見た。要は小規模生產者――農民或は手工業者――を凡ゆる壓迫と制限との幾重もの網をもつて縛らせ、そして彼をその際、所謂、手も足も出ないほどに嚇し付けることにあつた。この目的を農奴制國家はその一切の秩序をもつて達してゐたのである、彼は何よりも先づ全部の男子の住民を、絕えずその實數を確めながら、數へてゐた、それは『戸籍調査（レヴイーヂヤ）』と稱せられた（それは正に『檢察』、『調査』を意味する）。レヴイーヂヤによつて――第一回の戸口調査はピヨートル時代になされた――農民はそれ或ひは他の地主のものとして登錄された、領地は當時隨つて『調査農奴』（民間では單に『農奴』）のそれに歸せられた數によつて評價された。地主は彼に歸せられた農民を逃亡せしめず、且つ正しく人頭稅を納めしむることに責任があつた。その代りに彼等は地主の完全なる處理に委ねられた。彼は彼等を裁判し處罰した、懲役に至るまで。が彼に對して愁訴を企てる如きは農民は殘酷な體罰を恐れて敢へてしなかつた、地主に對し、皇帝に數願書を差出したに對しては、數願書の『作成者』も（この場合當時の農民が殆ど全部文盲であつたこと、隨つて、自分で願書を書くことが出來なかつたことを思ひ合せることが必要である）、同樣にそれを差出した農民も等しく笞罰に處せられ（吾々は直きにそれが如何なるものであるかを知るであらう）『無期懲役』にネルチンスクへ流されなければならなかつた。『輝かしき』エカテリナ二世の、それもおまけに彼女が、ブルジョア歷史家の保證する所に據れば、『自由主義的で』あつたしまた所謂『新法典起草の爲めの委員會』と稱せられる、一種の貴族階級的議會を召集した時に發布されたところの勅令がさう宣言してゐるのである（『ウロジエーニエ』、即ち法典はロマノフ家の第二世、アレクセイ・ミハイロヰツチ、即ちピヨートル一世の父の時代に公布され、しかもいづれの治世も新法律を起草する爲めに集らずに濟まされたことが無く、しかしそれからは何等の結果も生まれなかつた、そしてそれはニコライ一世が各時代に各皇帝によつて公布された勅令を全部よせ集め、そして、最重要なるものを拔き出して、それを『法典』と名付けることを考へ付くまで續いたのである）。

農民を威嚇する爲めの、凡ゆる手段をもつて武裝された地主は、廣くこれ等の手段を利用した。流刑に處することは稀であつた、勞働力を喪失することは彼にとつて不利益であつた。しかし彼は豫め彼に附與されたところの、農民を笞打つ爲めの、處罰の權利を行使した、そして殘酷に笞打つた。最も小さい罪に對して棍棒、鞭、革鞭が農民の背中に幾百となく幾千となく振りおろされた。古來のロシヤの刑具は棍棒（杖）及び笞であつた、革鞭は開化せる西歐から、バルチツク沿岸諸縣のドイツの地主から吾々のところへ來たものである、すべての者は革鞭が――非常に苦痛な、しかしさながら健康の爲めには棍棒よりも害がすくないかに見ゆる刑具であることを發見した。ロシヤの地主達は最初この「柔かい」處罰の形式を濫用した、そして數千回乃至數萬回の革鞭を命じた。唯だ漸次に彼等は、革鞭が棍棒よりもより確實にすら人間を打殺し得ることを確信するに至つた。この經驗の爲めに、恐らく、農民の生命の支拂はれたるもの一千ではなかつたであらう、しかし一人の地主も何物も失ふところなかつた。何故といふに、縱ひ地主に農奴を殺すことを許した法律がなく、實際に於て苟も主人の「自から手を下せる」殺害と、この言葉の直接の意味に於て、判決されたとしても（それも數千のその如き事件の中の一が裁判にかゝるだけのものである）、農民が殘酷な處罰の結果死亡したとしても、地主は常に殆ど正しく、惡いのは、處罰を行つた者、同じ農奴である數者若しくは給仕人であつた。恰も彼等が地主の命令に從ふことを敢へてしなかつたかのやうに！

農民を笞打つことは、馬を急がせる爲めに鞭打つのと全く同樣の珍らしかぬことと考へられてゐた。之については一切の羞恥なしに十八世紀の教養ある地主達が語つてゐた、例へば、有名な『手記』の作者にして教養ある農村の主人ボロートフの如き、彼は續けざまに五度農民を、その者が竊盜の共犯者を白狀しない爲めに、拷問にかけた。百姓は頑强に默り續けた、さうでなければ事件に全く關係のない者達を名差したりした、それ等の者達も同樣に拷問にかけられた、しかし、勿論、何物も彼等から引出すことは出來なかつた。遂に、犯人を死ぬまで拷問にかけることを恐れて、ボロートフは『彼の手足を縛して、そして、熱く焚き込まれた浴槽の中に投げ込んだ後、無理に鹽辛き魚を喰はせるやうに命じ、そして彼に嚴重な見張りを附して、苟もそれが彼の骨肉にこたへて眞實を自白するに至るまで、絕對に飲物を與へないで渴に苦しませるやうに命じた。彼は如何にしても渴に堪へることが出來ないで、遂に吾々に、以前に彼の共犯者であつたところの、眞犯人を自白するに至つた。』一度ボロートフは自分の一人の農奴を自殺させ、他の一人にはボロートフ自身の殺害を企てるに至らしめた。しかし『人間の眞の幸福への指針』なる書物を書いたところのこの開化せる人の良心は、その時も全く平靜であつて、そして『眞の惡漢にして、暴動者にして且つ追放人』は彼のところにあつては彼によつて苦しめられた人々であつたのである。

が若しも地主の家庭的の手段、革鞭、『鹽鯡の食養』、等、等が尙ほかつ不足であつたとせば、農奴も

亦、すべて之を怖れずして、地主に對する謀殺又は何等かそれに類するものにまで進んだ――同樣の殘虐を逞しうする、しかし遙かに大規模な一般國家的の裁判がそこで舞臺に現はれる。この裁判は又しても地主的であつた、裁判長及び副裁判長は貴族階級から選任された、が（農奴に非ざる）農民出の『判官』は貴族階級に附隨して番人乃至使者の役目を演じた、――時には床を掃きさへした。エカテリナの治世までではこの裁判が拷問を適用することが出來た。それは白狀しない罪人を後手に結いて拷問架へ吊上げることから始められた、その際體重の爲めに手は直ちに關節から外れた。若しこの地獄の苦しみが『白狀』させない時には、彼を更に笞で打ち始めた。それが今日農民及び馭者達が馬を追ふ爲に使つてゐる罪のない道具であつたと考へてはならぬ。『死刑執行人』（首斬人）の笞は最も重い革紐の編鞭であつて、その尖端に鐵線を卷きつけ膠をもつて固められ、隨つてそれは一種鋭利な針を植ゑられた分銅のごときものであつた。この鋭利な針の突起は皮膚のみならず、肉を骨の深さにまで引裂いた、そしてその笞の重さは、經驗を積んだ『執行人』が一擊をもつてよく脊骨を折り碎き得る程のものであつた。それを彼は、勿論、拷問に於てではなく（そこではそれまでにしない方がよかつた）、刑罰の際にやつた、何故なら笞は眞實を吐かせる爲めのみでなく、斷罪者を責める爲めの手段でもあつたから。若し拷問に於て笞が目的を達しなかつた場合には、――その次ぎの手段が適用された、特別の挾みで指を碎き、拷問にかけられてゐる者が『驚愕』するに至るまで繩で頭を緊縛し、最後に、火のついた箒で燒いた。

彼地の商業資本が全く同樣の威嚇[1]の手段を用ゐてゐたとは言へ、モスクワ人の野蠻主義に恐れをなしてゐるかの如く裝つてゐた西ヨーロッパに對する見榮張りから、エカテリナ二世はオフイシアルに拷問を廢止した。內密にはそれは尙ほ長く適用されてゐた、――政治的な事件に於ては、或る種の記錄に據れば、六十年代まで、即ちアレクサンドル二世時代まで行はれてゐたのである。これは裁判上の拷問に關してである、憲兵及び治安警察に關しては、彼等は、周知のごとく、尙ほ一九〇五―一九〇七年代にも、恐らくは、その以後にも行はれたであらう、何故なら體裁を飾ることは唯だ文書の上だけでよかつたから。

註1　笞、拷問臺、等、等は、例へば、オーストリア及びプロシヤの法律にあつた。が死刑の最も殘酷の形式の一つである――車引き（重い車で骨を粉碎すること）――は正に西歐から吾々のところへ移入されたのである。そこではそれはフランスに於て、例へば、革命前に適用されてゐた。

しかし文書の上に於ても笞をもつての罰は廢止する必要を認めなかつた、しかもそれが非常に屢〻罰せられる者の死をもつて終つたに拘らず、が死刑は、又しても文書の上で、既にエリザウエタ・ペトロヴナによつて廢止された。この女帝は、近衛隊と共に年少のイワン・アントーノヰッチを捕縛に宮殿へ赴いた時、非常な恐怖を感じて、成功の曉には何人をも死罪に行はないといふ誓言を與へたと

傳へられてゐる。吾々はその同じ成功の爲めに彼女がロシヤの敵である――スウエーデン人と密約を結んだことを記憶しゐる。帝位を獲得した後、彼女はスウエーデン人をも主なる神をも欺いた、自分の約束を反古にした、そして絞首臺を笞に換へた、結果は同じことであつた、不幸なる者は前よりも一層苦んだ。しかしその代りに文書の面からは『死刑』なる文字が無くなつて、唯だ笞の數だけがあつた。若しこの數が二三十以上に及べば、それは――確實なる死であることをすべてのものが知つてゐた、が一二〇笞をさへ命じたことがあつた、しかもその際經驗を積める首斬人は、吾々が知つてゐる如く、若しも當局者が命ずるならば、一擊をもつても殺すことが出來たのである。が若し當局者が犯人の死を望まない場合には、しかもそれがおまけに金持であつたならば、首斬人に賄賂をおくることが出來た、かくしてその者は笞數の多くの後尙ほ生殘り殆ど健康でさへあることが出來た。非常に彈力に富んだ刑罰法であつた、それ故にまた二重の便宜があつた。貴族階級に對しては、しかし、エカテリナが全くこの笞刑を廢した、――それは唯だ『賤しき』人々の爲めにのみ殘つた。彼女の息子のパーウエルは、笞刑を貴族に對しても復活した、その上尙ほ笞刑に代るべき、軍人の爲めの撻刑を考へ出した。罪人を棍棒をもつて武裝された兵士の二列の間を通過させ、各々はこれを打たねばならなかつた、そして長官は型のごとく打つやうに嚴重に監視した。大隊、即ち一、〇〇〇人の列間を、また聯隊、即ち四、〇〇〇人の列間を通過せしめた、その笞の一〇〇打を堪へ得るものは全然なかつた、それは再び假面を被せられた、僞善的な死刑の一形式であつた。

すべてこれ等の拷問は公開的に行はれた、國民大衆を一層威嚇しよう爲めに。しかしそれと全く同じ目的の爲めに裁判は全く嚴秘に附せられた。常に扉を鎖して裁判をしたのみでなく、法廷には辯護人も、被告自身さへもなかつた。裁判官の前には彼の調書と同樣に書面の形式をとつた證人の證言とがあつた、すべてこれを基礎として判決が下された、そして被告は單にこの宣告を聞かされる爲めに入廷せしめられた。秘密は嚴重に保たれた、事件の平凡な審議の內容を漏らすことは刑法上の犯罪と考へられた。かゝる情態以上に惡用の爲めのよりよき地盤を考へることの不可能であるのは自明である、金錢によつてこの裁判に於てはどんなことでもすることが出來た、最も明白なる罪人を『有力なる嫌疑』に止めて全く自由に放置することが出來た。そしてそれは全く自然であつた、若しも裁判が商業資本と資本家との利益を擁護することを目的としてゐたことを考へるならば。賄賂を使ふことの出來る者は、明かに、金を懷にしてをり、その者達から嚴に防禦されてゐるそれ等の人々によりは、寧ろその者達を防禦してゐるところのそれ等の人々に屬してゐることを意味する。どうして彼に惠みをかけてはならないか？　如何に賄賂が廣く行はれてゐたかは何人も文學によつてよく知つてゐる（例へば、ゴーゴリの『死せる魂』及び『檢察官』によつて、唯だそこには、ゴーゴリが書いた時のニコライ一世時代の檢閲の條件によつて賄賂の最も小さな場合のみが取られ得たのである、しかし印刷に

附するを得なかつた大事件に於ても、勿論、同じことであつた)。裁判官吏に賄賂を使ふことは門番乃至番人に茶代を與へると全く同樣の當り前のことであつた。ニコライ一世時代に司法大臣自身が、パーニンが、關係事件があつた時に、賄賂を使つた、しかも彼が全く正當で從つて事件は法律上必ずや彼に有利に解決すべき筈であつた場合にすら、それを使つたのである。習慣は――第二の天性である。

秘密は啻に裁判審理の上に懸つてゐたばかりでなく、秘密は農奴制國家の全生活を包んでゐた。商業全體が秘密の上に打立てられてゐる、商人達は相互に、又賈客からは商品の實價、その産地、その量、等、等をひし隱して居る。商業帳簿は――主人の全信用を獲てゐる人々にのみ見せるところの商店の聖堂である。同樣の秘密をもつて商業資本により創造された國家の生活もまた貫かれてゐた、國家の歳入及び支出は、例へば、當時は印刷されなかつた、隨つてそれを何人も、皇帝と二三の大臣を除いては、知るものがなかつた。上級の國家機關のすべての會議は閉鎖的であつた、がその最も重要なるものは――秘密でさへあつた、かゝる會議で何が起こつたかを漏洩することは裁判審理を漏らす以上の罪であつた。最もありふれた事實も、若しそれが國家の權力及びそれの代表者に關するものであれば、縱ひ最も小さなものであらうとも口外することは許されなかつた。ゲルツェンがペテルブルグから追放されたのは、彼が自分の父親に宛てた手紙に、一人の巡査が通行人を殺したことを書いたが爲めであつた。次ぎの場合はもつと酷い。ニコライ一世の妻が、アレクサンドラ皇后の名付日に、ペテルゴフで素晴らしいイルミネーションが作られた、ペテルブルグから數千の看客がそこへ押寄せた、偶〻その如き群集を滿載した二艘の汽船が衝突して、そしてその中の一艘が沈沒した。多くの人人が死んだ、しかしそれについてはひそ〳〵呼きかはされただけであつた、皇后の名付日がそこに關聯してゐた故に、それは口外してはならない事件であつた。一切の、最も重要ならぬ、事務上の文書にまで、『秘密』の表書がなされてゐた。これは最近まで他の國家との關係に關した外交文書の上に保存されてゐた、外務省には一九一七年まで秘密文書に非ざるものは一つもなかつた、それ故眞に秘密を要することを表示したい場合には、『大臣に限る』(若しくは『閣下のみ』)、『嚴秘』、等、等と書かれた、何故なら『秘密』なる言葉は最早何物をも意味しなかつたから、――すべてが秘密であつた。

この國家的秘密の保存者こそは官吏階級であつた。官吏階級乃至ビユロクラチヤ(事務卓、同樣に又官衙を意味するフランス語の『ビュロ』と力を意味するギリシヤ語の『クラトス』の二語より成れる野蠻語、ロシヤ語にては『課長』若しくは『官廳至上主義』)は刑罰の野蠻な體系乃至は事務的秘密と同樣なる農奴制國家の缺くべからざる附屬物である。固く扉を鎖された秘密の執務にあつてはすべてが文書によつてなされる。デモクラシーの時代には辯論をなし得る人々が頭角を現はし、また封建世界に於てはよく戰ひ得る人々が頭角を現はした如く、同樣に商業資本の統制時代には書くことを

得る、單に上手に書く文章家でなく、『事務上の文書』をよく書くことの出來る、即ち紛糾せる詭計的な文體で『國家的秘密』を述べたものを書き得る人々が頭角を現はすのである。この官僚的な難解なる文章はそれ自身國家の事務を外界より遮斷してゐたところの秘密であつた。普通の文字ある人々ばかりでなく、官吏學校を卒業しなかつた長官は、彼が署名したところの文書を解し得なかつた。如何なる大學も直接にそれ自身官吏的閲歴の爲めの教育を施すことは出來なかつた、課程を卒へた青年は事務局に於て、彼が次第に秘密の『事務的』語法を修得し終るまで、文書の淨寫に坐らせられた。三〇年勤續した老詭計者はこゝでは、すべての學問のドクトルよりも、遙かに有力であつた。商業資本及び彼等の要求の爲めの農奴制度によつて創造されながら、而もその詭計的な秘密主義によつて官吏は逆に彼等を支配した、下男が自分の主人達よりも強くなつた。商人は官吏の勢力に不平を鳴らした、地主は彼に詔つた、さうでなければ無力な狂躁に齒を喰ひしばつた。『官吏ビユロクラツトと社會の成員とは全然正反對の存在である、』と或る貴族が農民改革の當時に書いた。

官吏群は吾々のところに於ては商業資本と同時に、既にモスクワ時代のルスに現はれてゐる。當時の官吏デイヤーク（秘書）は既に自からの中に、恰も種子が自からの中に全部の未來の植物を含んでゐるごとく、末來の『官僚』の一切の特殊性を含んでゐた。全く高貴ならぬ出身の人々（最初の秘書達は奴隷の出であることも稀でなかつた）、彼等は廣大なる權力を握り、――外國人には『貴族會議附きの主腦の秘書達が全く『皇帝』の如く思惟されてゐた、――莫大の富を擁し、『お伽ばなしに出て來るやうな石の宮殿』を構へ、當時の商人階級をして不平を鳴らさしめた。遂には彼等の中の成功者が榮達して、暗黑時代の、皇帝ヴラヂスラフの御代には、秘書のフヨードル・アンドローノフが國家を統治した、初期ロマノフ家時代には秘書達が貴族會議を號令した、そしてロマノフ第三世の治世には秘書の娘が皇后になつた、即ちビヨートルの最初の妻は（それを彼はその後修道院に押籠めたのであるが）ロプーヒナであつた、がロプーヒン家の祖先は秘書であつた。ビヨートル時代に外國から招聘されたこの仕事の專門家によつて勢づけられて、官吏階級は全く完全に組織化され終つた、すべての國家への勤務者が『官等表』によつて十四級に分たれ、最下級は出入の文書を書留める『レギストラートル（書記）』で、上級には『ターイヌイ（樞密）』および『デイストウイテリヌイ・ターイヌイ・サウエートニツク（眞正樞密顧問官）』が立つてゐた、その官名によつて序に一切の體系が據つてもつて立つてゐた所の基礎――『國家的秘密』を思はしめながら。社會に於ける人間の價値が官等表に於て如何なる地位を彼が占めてゐるか、如何なる官等にあるかによつて測られた。名門の貴族の爲めには勤務につく事なしに官等を授けられることに定められた。しかし地方の地主達は全くその地方の顯官に從屬してゐた。ペテルブルグから任命された官吏、縣知事は、貴族を捕縛することが出來た。地方の貴族團はそれ故に『官僚の跋扈』から唯だ團結的にのみ自衛することが出來た、各郡及び各縣の貴

族達はそれ〴〵團長を選んだ、知事もそれを尊重しなければならなかつた、そして貴族會は官吏の手を經ずして、直接皇帝に歎願書を呈出することの出來る權利を持つてゐた。

セワストーポリ役が『改革』についての問題を提起した時、改革は農奴制度にのみ局限され得なかつた、それは必ずや警察にも、裁判にも、『官僚』にも關聯しなければならなかつた。最後のものは强固な遺制として、『改革』の壓迫を排して、一般的にまた全體的に、商業資本の爲めに權力を保存した。最も多く農奴制國家が犧牲にしなければならなかつたのは裁判の領域であつた。工業資本のみならず、商業資本も今や國の經濟生活が受けなければならなかつたところの、その變動に當つて賄賂が何を彼等に値するかを考へないわけには行かなかつた。比較的に小さな以前の商業融資に際しては萬乃至十萬代で濟んだ、然るに今や千萬代を呼ぶに至つた、自分の利潤のかくの如き減少には資本家は平氣でゐられなかつた。賄賂に對して容赦なき戰ひが開かれた。賄賂を到る所で――新聞、雜誌、喜劇、小說、物語に於て、毒殺した。既にニコライ一世が、――吾々は彼が片足をもつて新らしい、工業的ロシヤに立ち、また他の片足をもつては――舊き、商業的ロシヤに立つてゐたことを記憶してゐる、――小さな賄賂者に對する曝露（ゴーゴリの『檢察官』及び『死せる魂』）を許さなければならなかつた。その彼はまた笞を廢さねばならなかつた（杖と『撻刑』とを保存して）、そしてその彼の治世に、終り近くに、新らしい基礎の上に裁判改革の案が作成された、しかし彼には、例によつて、案を實現する勇氣が不足だつた。農奴制度が廢された時、ニコライの案は既に古くなつてゐた。アレクサンドル二世の裁判改革は遙かにそれよりも進んだものであつた。それはロシヤに殆ど西ヨーロツパの（即ち發達せる工業資本主義に特有なる）裁判法の形式を導入した。秘密裁判が公開的な、辯論的なものに替へられた、專ら書面の上で行はれてゐたものが口述審理に替へられた。最後に、重大な刑事々件の判決は官吏によつてではなく、社會そのものの裡から採用された裁判官によつて行はれた。そしてより重大ならざる事件の爲めには選擧による『平和判事』の制度が採用された。

裁判改正の『偉業』についてブルジョア著述家達が農民問題の『公平無私』についてよりも一層聲を大にして叫んだのは自明である。欺瞞はこの場合ほんのすこし尠なかつたかと思はれる、裁判改正は六十年代の改革中の最も成功せるものであつた、殊に、同時に裁判中の笞刑が全然廢止されたことを考慮に入れるならば（唯だ農民の、郡裁判所のみが、それは吾々の知る如く、貴族階級の權力の下にあつたが、笞を使用する權利を保存してゐた）。しかし矢張り、第一に、改革が最も愼重にブルジョアジーのみの利益を守護したことを忘れてはならない、都市に於て裁判官たり得たものは唯だ一定の收入（俸給その他）、著しく普通の勞働者若しくは小官吏すらの報酬を超過せるものを有する人々のみであつた。都市の裁判官には、かくて、ブルジョアジーのみがなつた。農民からは裁判官には唯だ以前に農民の『自治團體』に於て何等かの職務に從事した事のある、即ち貴族階級の『土地爭議裁定

官』によつて完全に教育された者のみがなることを許された。平和裁判官も同様に相當の財産を所有する人々からのみ選擧されることが出來た。が大事なことは、裁判の新形式、かくも稱讃された所の『口述辯論による裁判法』、『抗爭過程』が、故意の如く、富者の爲めに設けられてゐた。裁判に於て公に喋る爲めには、或る程度の教養、裁判形式の知識、最後には、單に場慣れが必要であつた。これ等すべてを勞働者若しくは農民はどこに求めることが出來たか？　が金錢上の問題について、土地について爭はれる民事裁判に於ては、私有財產についての法律を知らねばならなかつた、がこれ等の法律は、惡魔自身が足を折り兼ねないほど古いまゝで殘された。新らしい法律はこの時も書かれる暇がなかつた。富める人々はすべてこれから、辯護士、即ち絕えず裁判所に出入してその一切の機微に通ぜる法律家を雇つて、自分を護ることが出來た。貧乏人には裁判所から辯護士がつけられた。しかもそれは、大部分、若い未熟な辯護士であつた、老練なる者は何とかかとかして彼等に『名譽』を豫約しない事件をすつぽかすべく努めた。裁判上の抗爭に於てはブルジョアはかくて非ブルジョアよりも遙かによく武裝されてゐた。第二に、改革はブルジョア歷史家も承認せざるを得なかつたほど、不徹底に行はれた、しかもその後可成に速かに尙ほ一層カットされさへもした。政府自身が利益關係を有した最も重大なる事件、『政治上の』事件の爲めには依然として所謂『身分代表』(しかし身分の代表は、吾々の知る如く、古い裁判にもあつたのである)を有する官吏の裁判が殘つてゐた、間もなくこの裁判所は官吏の關係する一切の事件にまで擴張された。口頭辯論は裁判所に『扉を閉鎖すること』、即ち審理を秘密にすることを認めたことによつて殆どその意義を失つた。傍聽禁止に際しての身分代表の裁判所は既に往時の裁判からほんの少し――唯だ辯護人が出席したことだけが違つてゐるのみであつた。最後に、行政處分がそのまゝに殘つて、國務大臣乃至縣知事が一切の裁判審理なしにシベリヤへ流すことが出來た。が警察は一切の審理なしに警察署に於て、必要と認めたところの者を打擲した。

アレクサンドル二世の改革の最も『ヨーロッパ的な』部分が、かくて、十分に『眞にロシヤ的な』性質を保存した。無邪氣なる人々が完全に官僚の角を折ることが出來ると考へてゐたところの更に他の改革――地方自治機關の改革に於ては尙ほ一層それが殘つてゐた。一八六一年までは地方問題――警察、小犯罪の裁判、道路、橋梁、等、等の整備――は悉く都市の商人と農村の地主との掌中にあつた。換言すれば、ロシヤの住民の九〇パーセントの地方問題が貴族階級によつて解決されてゐた。地方の經濟、道路、橋梁、病院、學校については殆ど何人も心を勞しなかつた、それに最後のものは殆ど存在すらしなかつた、病院は寧ろ『開化せる』主人達によつて一部分は虛榮から、一部分はよく整備された經營の缺くべからざる附屬物として建てられて、大領地に見出された。一と口に言つて、改革前の『地方自治體』は殆ど誰にも知られてゐなかつた、それ故に一八六四年に『地方自治機關』が創設された時には、すべての者が、ロシヤに何か新らしいものが出現した如く、自惚れの改革者達に

思はれてゐた所によれば、何か全く獨創的な、これまで如何なる他の國に於ても考へ付かれなかつたところのものが現はれた如く感じたのである。事實は吾々の地方自治機關はヨーロッパに於ける最も官僚的プロシヤからそつくりそのまゝ寫し取られて來たに過ぎない。そこから地方自治團體への選擧資格――地方自治機關への選擧の爲めに住民を三『級』に區分することも借りて來られた、唯だプロシヤに於てはこれ等の『級』は租稅の納付額によつて、換言すれば、財產によつて、區別されてゐた、即ち大ブルジョアジーは全投票數の三分の一を持ち（これに屬する住民は、恐らくは、一パーセントをも成立ててゐなかつたとは言へ）、中小ブルジョアジーは三分の一を有し（住民の中、恐らくは、十分の一がこれに屬してゐたとは言へ）、そして殘りの全住民、即ち人口の九〇パーセントまでが、同樣に三分の一を有してゐた。プロシヤに於ては、かくて、選擧はまつたく純粹にブルジョア的原則――財產の上に基礎づけられてゐた。この原則の『ロシヤ化』は、吾々のところに於ては、公然にではないとしても、身分的原則が採用されたことに現はれてゐた。全投票數の三分の一を『個人的土地所有者』、即ち貴族・地主が受取つた、何故といふに工場主も領地を有つてゐたところの工業地諸縣を除いては、他に個人的土地所有者なるものは存しなかつたから三分の一は『村團的土地所有者』、即ち農民に與へられて、そして殘りの三分の一が凡ての殘りの者、即ちブルジョアジーに與へられた。郡會に於ては貴族及び官吏は、それ故に、全票數の殆ど半數、がブルジョアジーと合體する時は殆ど三分の二、然るに農民は三分の一を超えること幾何もなかつた。既に直接に住民によつてではなく、郡の自治體によつて選まれたところの縣會議員の選擧に於ては、多數は前以つてブルジョアジーによつて占められてゐた、がこの最後のものの間に於ては――土地所有者によつて。縣會に於ては貴族及び官吏は既に五分の四、然るに農民は十分の一以下を成立ててゐた。最後に、地方自治體の執行機關である參事會に於ては、即ち自治體の『政府』に於ては、――何となれば一年に一回二十日以下の期間をもつて召集されたところの、郡縣會ではなくして、常住的に活動してゐたところの參事會が正に政治を行つてゐたが故である、――地主階級の優勢は一層顯著であつた、郡に於ては彼等だけで、ブルジョアジーの援助なくしても、絕對多數を形成してゐた、そして縣參事會に於ては彼等は十分の九であつた、が農民は一・五パーセントに過ぎなかつた。

その代り、若しも吾々が地方稅を取るならば、吾々は丁度その反對の情況を受取るであらう、「分讓地」、即ち農民地の一デシヤチンは四〇コペツク、貴族の所領地は二一コペツク、國有地及び『御料地』、即ち皇室に屬する土地の一デシヤチンは讒に一二コペツクを納付した。殆と福音書の言葉通りである、持てる者は與へられ、持たざる者は奪はる。一八六一年の二月十九日以後に『餘剩產物』を農民から搾つてゐたところの重荷に、『地方自治制度』も亦自分の錘をぶら下げた。それに尙ほ地主達が非常に不正確に彼等に割當てられた稅金を支拂つたこと、地主の土地の未納稅は農民側のそれよりも

遙かに多く、その上地主が富裕であればあるほど支拂が惡く、又彼から何かを沒收することがより困難であつた事實を加へるなら、――情景は完きものとなるであらう、自治體改革に於ても、農民改革に於けると同樣に、舊き秩序は半ば以上勝を占めた。地方自治は、本質に於て、農民の費用によつての、貴族的自治たるに留まつた。そして最後のものは辛うじて、今やそれが以前よりも一層すくなく自治的であることによつて自からを慰めることが出來た。純農奴制國家は六十年代以後のロシヤに出現した半農奴制のそれよりも遙かに多くの信用を地主に置いてゐた。商業資本は、一八六一年に貴族階級の一部が彼の競爭者なる――工業資本の側に移つた事を忘れる事が出來なかつた。自治體の改革までは地主達が地方裁判官をも、その地方の警察官をも選任してゐた、成程裁判官の選任は彼等に殘された、平和判事は郡會が選擧した、被選擧人たる爲めには一定の價格以上の領地を所有しなければならなかつた事を考慮に入れないでも、何人を彼が選擧したかは問はずして明かである、農村に於ける平和判事は常に地主の出であつた。しかし警察官は中央の權力がこれを任命することとなつた、以前には地方警察官は郡の地主達によつて選擧された、今や彼を縣當局が任命した。そしてこの當局の權能に關しては郡縣會は以前の貴族會（特殊的に、身分的組織として殘存してゐたところの）よりも遙かに少く自主的であつた。彼等は『陛下』に宛てて嘆願書を差出す權利を有してゐた、がこれ等は――有しない。隨つて知事は決定的に彼等の上に置かれた、彼は彼等の決議の『合法性』を監視しなければならなかつた、さながら如何なる國に於ても正に法の擁護者として現はれてゐるところの裁判所がそれを爲し得なかつたかのやうに。

商業資本主義は、かくて、すべての戰線に於て極めて少く退却した、そして直ぐと『後方陣地』に於て鞏固に自からを武裝した。ロシヤの工業は既に久しい以前にイギリス及びフランスのそれが受取つてゐた所のものを――即はちブルジョア議會によつての國家組織への參與を獲得しなかつた。彼女はドイツのそれが持つてゐたところの、――かゝる組織に於ける常備的評議權をさへも受取らなかつた。中央權力に附隨する常備的ブルジョア代議制をロシヤのブルジョアジーに與へたものは實に一九〇五年の勞働革命である。彼女は自由勞働者をすら受取らなかつた。ロシヤの工業ブルジョアジーの西歐のそれに比しての斯くの如き低級なる狀態は何によつて說明されるか？　何故に彼女は六十年代の哀れな『大改革』以上のものを敢へて掴むことをしなかつたか、そしてそれすらも、吾々が次ぎに見るであらう如く、讓步なしに主張し得なかつたか？　この場合吾々は過去を振返へることが必要である、然る時吾々は、ロシヤのブルジョアが最初その空想に於て西歐のそれよりも寧ろ果敢でさへもあつたことを、しかも苦澁なる現實、――ロシヤの經濟的發達の現實、――がこれ等の空想の翼を剪りとつたことを見出すであらう。

第十章　革命的ブルジョアジー

これまで吾々はロシヤに於ける國民經濟と國家形態の發展を、恰もこの過程が全く圓滑に、如何なる障礙にも突當らず、所謂、節なく、裂目なく、經過したかの如くに叙して來た。吾々はこの過程が常に一つの目的――或る時はそれ、或る時は他の方法によつての農民の搾取に向つてすゝんだのを見た、その際最初には商業資本だけが、餘剰産物を彼から奪略することによつて農民を搾つた、がその後彼は工業資本と組合つて、しかし矢張り獅子の取前をば自分に殘こして、これを爲すに至つた。然らば農民自身は、無關心に不平なくこの、絶えず增大する搾取を忍んでゐたであらうか？　それとも彼は絶えず蠢動を續けたであらうか、彼の脊に乘つてゐる者に、彼、農民が同樣に生ける人間であつて、木の腰掛でないことを、隨つて彼の農民的背中が重さを感じることを思ひ出させながら？

蠢動した、そしてそれは或る者には肉體的な恐怖を、他の者には――時として根據ある――希望を起こさせたほどに力强かつた。これ等の希望からは、それについては吾々が次ぎの章に於て述べるであらう所の、國民主義的革命が生れた。がこれ等の恐怖は吾々のところに於てブルジョア革命を支持した、ロシヤのブルジョアジーの中から革命性の最後の殘物を追出したところの勞働運動がロシヤに始まつたその時まで。

しかしこゝで暫く、ブルジョアジーの『革命性』について叙する場合、如何なるブルジョアジーについて吾々が語つてゐるかの問題に立ちどまる必要がある。屢々それは、嘗て資本家の階級（その際それが果して如何なる種類かを區別してゐない、商業資本家かそれとも工業資本家か）が自から、直接に、革命的であつたといふ風に理解されてゐる。さういふことは一度もなかつたし又どこにも在り得ない。革命は常に國民大衆の運動であり、常に、直接若しくは間接に、搾取に反對して向けられてゐる――一切の革命がさうである、社會主義的のそれのみには限らない。如何にして搾取者が搾取に對する鬪爭に國民を招き得るかを思へ。さういふことは、勿論、決して起り得ない。しかし或る搾取者は常に他の搾取者に對する被搾取者の反逆を利用することが出來る。これは――若し欲するならば、ブルジョア的競爭の特殊の形態である。即ち、フランスに於て、十八世紀末に、工業資本が、農民及び勞働者の革命の助けをかりて、緊密に土地私有に結付いてゐたところの舊商業資本を鞍の上から突落し、そしてその後自から商人と地主達の場所に坐り込んだ。しかしこれは、フランス革命の直接の指導者が工場主達であつたことを意味しない。一七八九年のフランス革命は一工場内に起つた暴動に始まつたのである。フランスに於ける革命の指導者達は工場主でなく、一般に企業家でなく、企業家と小ブルジョアジーとの中間階級、――緊密に工業資本主義と結付き、それに依據してはゐるも

のの、しかし自から直接に國民大衆を搾取することをしなかつたところの階級であつた。それは資本の教養ある共力者、ロシヤに於てインテリゲンチヤ（即ち『知識ある、理解ある』人々）と呼び慣らされてゐるところの『文字ある職長』の階級であつた。

インテリゲンチヤも同樣に餘剩產物によつて生活してゐる、――こゝにブルジョアジーとの關係がある。資本主義がより急速に又より廣汎に展開すればするほど、それだけ彼女にはより有利である、何となれば知識階級的職業が多くなり、それだけ知識階級にとつての活動の範圍が廣くなるからである。文學者、俳優、藝術家達は商業資本のところでは道化者乃至滑稽者の境遇にあつた。このインテリゲンチヤ全體は或はさう大してインテリゲントでなかつたか（官吏達）、乃至社會的な意味に於て極めてその影響するところ微弱であつた。それ故に商業資本主義時代の革命にはインテリゲンチヤはあまり關係しない、吾々はそれを直きに見るであらう。しかし、工業資本主義の發展につれて、そこへ法律家・辯護士、新聞記者・雜誌記者が參加し、次いで機械技術の擴大につれて、技師、等、等が參加する。これ等は既にブルジョア社會にとつて非常に必要であり、從つて彼等の社會的役割も遙かに巨大である。フランスに於ては革命の指導者は、主として、辯護士及びジヤーナリストであつた（しかし醫師もあつた――マラー、技師もあつた――カルノ、及びその他）。他の場合にはそれは文學者、教師若しくは軍人ですらもあり得た。ブルジョア革命への軍人の參加はスペイン、イタリー及び吾がロシヤに於て最も顯著である、吾々のところに於ける最も主要なる、ブルジョア革命の進出である十二月黨員の結社（前章參照）は悉く軍人であつた。

かくて、ブルジョア革命性の直接の擔ひ手として現はれるのは企業家的ブルジョアジーでなくして、インテリゲンチヤである。これを牢記しよう。そして序に、インテリゲンチヤが如何なる終局的結論にブルジョア革命が傾くかを理解し、彼女が工業資本の爲めに商業資本に對して鬪爭しつゝある事實を彼女自身明かにしてゐることが、決して必須の條件でないことを注意して置かう。革命はその活動家から感激、犧牲、すくなくとも、自分の生命と地位とを賭けての冒險を要求する。しかし誰が工場主が商人の襟髮を掴んで追ひ立てつゝある光景に感激し、そして誰がその爲めにどんなことがあらうとも生命を拋つ氣になるであらうか？　吾々が上に述べたところのすべてこの鬪爭の經濟的原因を、インテリゲンチヤはてんで理解しなかつた。彼女は農奴制國家の外面的な現はれ、――皇帝の權力の專恣、官吏階級の賄賂沙汰、殘酷な刑罰、下層階級の窮迫――を見た、そして彼女はすべてこれに對して自由の名に於て反逆した。人間による人間の搾取が存在する限り、資本主義が存在するかぎり、眞の自由が在り得ないことを、それをインテリゲンチヤは長いこと自覺しなかつた。が自覺した時、その大多數は革命的であることを止めてしまつた。何となればインテリゲンチヤは、繰返して言ふが、ブルジョアジーと同樣に、農民若しくは勞働者から强制的に搾出されたところの餘剩產物によ

つて生きてゐるからである。共産主義的革命は彼女にとつては、彼女がこの有利な分前を失はねばならず、自分の以前の卓越を放棄して、肉體勞働の勞働者と同一の隊列に立たねばならないことを意味した。さればこれに赴き得たものは唯だ少數の、最も眞摯なる且つ献身的なる革命家・インテリゲントのみであつた。

ブルジョア革命性の基本的性質を明かにした後に、吾々は今やロシヤのブルジョア革命が、他の一切のそれと同樣に、立たなければならなかつたところのその基礎に、即ち國民的農民運動に移るであらう。吾々はこの基礎がしかく動搖したところから、ブルジョア・インテリゲンチヤが何物をもその上に打立て得なかつたことを見出すであらう。それは唯だ非ブルジョア的建物にのみ堪へた、――さういふ風にそれはもう出來てゐたのである。

本書の第一部に於て吾々は、農民大衆の、彼女に上にのしかゝつて來つゝあつた商業資本の搾取に抵抗しようとした、十七世紀の初め、ロマノフ王朝出現前（『暗黑時代』）に於ける、又その末葉、ピヨートル一世の登極前（ラーヂンの叛亂）に於ける試みが、二つながら失敗に終つたことを見た。ラーヂン以後きつちり一〇〇年間ロシヤには大なる農民運動は存しなかつた。國民が絶望して手をおろしたのだと考へることが出來た。事實は、最初に暗黑時代が、次いで北方戰爭が甚だしく人口を稀薄にしたのによる、即ち各農民一人の分前が以前よりも多くの土地を獲ることとなつたからである（『暗黑時代』前には、例へば、農民の各一戸に對して二デシヤチン半であつた、が八十年を經たる後には――既に九デシヤチンである、各戸の頭數は、成程、同樣に增加した、しかし著しくすくなく、二倍以下である）。農民は、それ故に、搾取を堪へ忍ぶことが遙かに容易であつた。しかし、十八世紀の後半へかけて、人口が再び稠密になり、土地狹隘の徵候が現はれるや否や（ピヨートル一世の第一回の戸口調査は男子農奴五百五十萬を數へたのに對して、四十年後の第三回調査は、既に殆と七百五十萬を數へた、それが極めて杜撰なものであつたに拘らず。實際に於ては、當時の統計は八百五十萬までを數へてゐる）、再び農民の『動搖』が頻發し始め、十八世紀の七十年代には廣大なるプガチヨフの叛亂となつて擴がつた。

原因は土地の狹隘のみでなかつた、――それは唯だ事情を極度にまで全ロシヤに亘つて緊張せしめたに過ぎぬ、農民革命の地方的原因は他にあつた、それは既にそれがロシヤの東部邊境に於て、即ち丁度また土地狹隘が主たる禍であり得なかつたところのウラル及びボウオルジエに於て勃發し且つ最も猖獗を極めたことから見ても明かである。しかしこの際この時代、即ち十八世紀の後半期が、ロシヤの麥の貿易の最初の發展の時期であつたことを思ひ出すことが必要である。ロシヤの小麥は既に海外へ輸出されつゝあつた、エカテリナ二世は既に彼女の爲めに道を拓り開く爲めに、トルコとの間に戰端を開いた、がボウオルジスク及びプリウラリスクの諸縣は――今日に於ても最も豐饒な、最も麥

の産額の多い諸縣である。こゝでは餘剰産物に對する地主の食慾が特に鋭かつた、而も農民は尙ほ比較的にすくなかつた、これが爲めに東部ロシヤに於ける農民の搾取は特に狂暴なるものがあつた。こゝでは賦役勞働が、他の地方に於ては農民から一週三―四日を要求したのに對して、時に六―七日までに達した。農民の所に縱ひ大なる分讓地があつたとしても、――何時彼はその上に經濟を營み得たか？　既に當時のロシヤには到る所に、奴隷があつたが、これ等の地方に於ける農民は、他のどこに於てよりもより多く奴隷であつた、それはアメリカ植民地のニグロ或ひは何一つ自分のものと言つては無く、すべてが主人のものであつたところの古代ローマの奴隷を思はせるものがあつた。

啻に農耕民のみならず、ウラルの鑛業工場の農奴職工も亦かくの如き情態にあつた。このことは特に重要である、何となればウラルの鑛山勞働者及び鑛業工場の農民の上に（最後のものは工場の爲めに森林を伐採し、坑道を穿ち、井戸を掘り、等、等しなければならなかつた）プガチョフの主要の勢力が支持されてゐたからである。この最後の者、その出身に於てドン・コサツクは、最初テレク（北カフカズ）に於て活動し、そこで顯著なる役割を演じた、その後ウラル河（當時ヤイークと呼ばれてゐたところの）に轉じ、そしてその地のコサツク團が大なる動搖の中にあるのに際會した。ヤイークのコサツクは、主として、（一部は今日までさうであるやうに）、漁業を營んでゐた。彼等は魚を捕り、鹽漬にし、そしてそれをロシヤへ送つてゐた。しかし鹽は政府の專賣であつた、そして鹽の請負はコサツクの長老の手に握られてゐた。コサツク民衆は長老の下にあつてさながら死の係蹄にかけられてゐるのと同然であつた、鹽稅のみに限らず、長老は尙ほ各種の最早まつたく不法なる稅金をコサツクに課した。コサツク達は叛逆した、特に自分の搾取者・頭目達に對して。しかし頭目達を助ける爲めにオレンブルグから軍隊が派遣された、そしてコサツク達は殘酷な鎭壓に渡された。コサツクの多數が笞でもつて折檻され、懲役に送られ、軍隊に引渡された。憎惡は恐るべきものとなつた、そしてプガチョフが自分を『奇蹟的に無事なるを得た』ピョートル三世であると宣言した時、コサツク達は四方から彼の周圍に群がり始めた。プガチョフが、最初に彼のもとへ馳せ參じた者達に、彼等が彼を推戴するかどうかを訊ねた時に、彼等は異口同音にかう彼に應へた、『父よ、吾等は推戴せん、唯だ吾等の味方となり、長老より受けたる吾等の侮辱に助力せよ、吾等はまつたく大なる稅金の爲めに悉く疲弊し果てた。』

エカテリナ二世の政府に對するこの叛亂もこれまでのと同樣に、しかし容易に鎭壓し得るかに見えた。プガチョフ追討に派遣された將軍は何よりも先づ、その者が『逃亡を企て』、彼の手を遁れはしないかを惧れた（プガチョフは一度既に『ピョートル三世』の資格に於て捕縛され、しかも無事に遁れた）。ところが、數週間後にこの將軍自身が『逃亡を企て』た。如何にしてこれは起つたか？　第一の者の交替に送られた他の將軍がペテルブルグへ書き送つた如く、『賤民の一般的動搖、』『惡業の內外に

跳梁しつゝある、住民の側よりの裏切りと反抗』がプガチョフを迎へたからである。が第一に『一般的動搖』がその農奴、勞働者及び農民より成る住民と共にウラルの諸工場を捉へたからである。『この際、――とペテルブルグからイギリス公使は自國の政府に向つて報告した、――官營鑄物工場に於て鑄造された銅の大砲の多數が叛逆者達の手に歸した、彼等は數個の工場を破壞したが、その中にはデミードフの工場の一つもあつた、その農奴及び農民は全部プガチョフ軍に投じた。』

この場合プガチョフが工場を破壞したことだけはあやまりである、實際には工場は彼の爲めに働いた、火藥と彈丸とを彼に供給した。大砲を鑄ることの出來た人々は、それを打つことも出來た、彈藥と共にプガチョフは工場から砲兵をも受取つた、そして彼等は政府軍のそれよりも優つてゐた。ウラルの鑛山勞働者の參加はプガチョフの軍隊にエカテリナ二世の軍隊に對する技術的卓越を與へた。そして又ブリウラリエの遊牧民族、特にバシキール族（彼等を政府は凡ゆる方法をもつて苦しめ殲滅すべく企圖した、一回の叛亂の後バシキール族は三萬まで虐殺された）、は騎馬隊をもつてプガチョフを力づけた。彼がすべてこれ等の兵力を提げてボウオルジエへ現れた時、彼には眞正の軍隊があつた。

若しプガチョフが一擧にモスクワを突いたならば、彼は、恐らく、完全なる成功をかちえたであらう、モスクワ及びツーラに於ては職工達が同樣に動搖してゐた、が貴族階級は完全なる恐慌のうちにあつた。しかしコサック達が、彼等の理解によれば、主要なる敵――知事が據つてゐたところのオレンブルグに止まることを彼に餘儀なくさせた。この爲めに彼は時期を失した、反對にエカテリナは勝運に惠まれた。ウラルへ向けて大軍が差向けられた。數回の戰鬪に破れた後もプガチョフは依然として脅威であつた。彼は、遂に、最初からさうすべきであつたところの――モスクワ街道を、カザンに向けて進出した、到る所農民のみならず、僧侶階級によつてすらも歡び迎へられながら、最後のものは農民に對する恐怖から十字架と幡とをもつて『ピョートル三世』を迎へた。すべての地主を容赦なく殲滅した、――プガチョフの叛亂を通じて地主の絞殺されたもの數千を數へた。『モスクワに於ては――と一人の同時代者が書いた、――奴僕達、工場の職工達及びモスクワの無數の賤民の大衆が、市街を練り歩きながら、殆と公然と狂暴な自分達の好意と忠誠とを、彼等の言葉によれば彼等の好ましき自由を齎しつゝある僭稱者に對して表示した。』

如何なる自由をプガチョフは齎しつゝあつたか？　自分の『マニフエスト』の中で彼は『從來地主のもとにありて農民及び人民たりしすべてのものに吾等の王冠の忠良なる臣民』――たることを、更にそれを說明して『徵兵の義務、人頭稅及びその他の稅金を要求することなく、しかし土地、森林、草刈場、漁場、鹽田を購買乃至年貢なしに領有して、』『永久にコサックたることを』『許した。』これは、明かに、土地を附するのみならず、嘗て彼等及びコサック達から地主及び請負によつて取上げられた所のすべての采地を農民に返還することによつての（漁場及び鹽田は請負に渡されてゐた）農民

解放の完全なるプログラムであつた。そればかりでなく、農奴制度を通じての商業資本の直接の壓迫のみでなく、租稅を通じての間接的のも亦排除された、即ち既に上述した人頭稅の外に、徵兵と竝んで、マニフエストは農民を『從來――惡者なる貴族、都市の收賄者及び裁判官によつて――行はれ、農民及び全國民に賦課されつゝある一切の租稅及び重壓から』解放した。農奴制國家の存在の全意義を滅却せる、かくも根本的な改造を、マニフエストは明かに、その名に於てマニフエストが書かれたところの、皇帝の權力のみによつて斷行し得べしとは考へなかつた。その結言に於てマニフエストは農民に自己の手段にて、地主達を、『吾等の權力の反抗者達、帝國の攪亂者達、農民の荒廢者達を捕縛し、刑戮し、絞殺すべきこと』を慫慂した。

マニフエストは啻に政治的轉換を期待しなかつたばかりでなく、それどころか、獨裁的權力を絶對に擁護した。自分の小さな君主――地主を刑戮したばかりの人々が、大きな地主――皇帝の從順なる奴隷とならなければならなかつた。プガチョフのマニフエストの作者（恐らくそれはあまり文字を解さなかつた人間として、プガチョフ自身ではなかつたであらう）は、思ふに、何の爲めに又何故に君主獨裁が存在するかを全然理解しなかつたのである、農奴制國家の王冠を戴ける上層を、その全基礎を破壞した後に、保存しようとすることが不可能であることを理解しなかつたのである。しかしそれを彼に責めることは出來ぬ、何故なら吾々は、その後百年を經て、教養ある人々、教授達が、國民を解放し、しかも皇帝の權力をロシヤに殘し置く事が出來ると考へてゐたことを知つてゐるから。その代りマニフエストはこれ等の一八六〇―一八七〇年代の教養ある人々よりもよく、農民を解放することは――地主の權力を全然、根こそぎ、若し一人の地主が殘るならば、農奴制度のかけらにせよ殘るであらうほど、掃蕩することを意味することを理解してゐた。

プガチョフは多くの地主を殲滅することに成功した、しかし地主階級を殲滅することは出來なかつた。中央の、基本的な地主的ロシヤへは彼を入れさせなかつた。彼の軍隊は個々の政府軍を擊破する爲めに十分によく組織されてゐた、しかし全政府軍と決戰することはプガチョフには出來なかつた。激戰の後カザンから擊退され（『惡漢達は最もよき戰爭に於てのみ見得る如き、その如き銃砲火とその如き死物狂とをもつて余を攻擊した』とガザン附近でプガチョフと戰つた將軍が長官に書き送つた）、しかし、必ずしもまだ全滅させられないで、プガチョフはウオルガを下つて走つた、そして直きに今日のシンビルスカヤ、サマルスカヤ、サラトフスカヤ諸縣の全廣がりが一面の農民暴動によつて占められた。ツアリーツイノの會戰で初めてプガチョフ軍は致命的な打擊を受けた。プガチョフは曠野に遁れた、コサック達によつて引渡され、一七七五年一月十日モスクワに於て刑せられた。農民叛亂は野蠻なる殘酷さをもつて鎭壓された、多くの村々が懲罰隊によつて全村『丸坊主』にされた。そして尙ほ長く暴動地方のすべての村々の近くでは、『賤しい狀態の惡漢と罪人への』見せしめに、絞首臺及

び車引きの車が飾られてあつた。

プガチョフの叛亂を鎭壓した後、農奴制國家は、一見、恰も尙ほ一層大膽になつたやうに見えた。實にこの直後にエカテリナ二世はウクライナに農奴制度を擴張した。事實は彼女は非常な恐怖に捉はれた。叛亂が地方に官廳と警察の少いことから起つたこととして、エカテリナは縣の數をその官吏群と共に增加した、即ち今や一人の知事が三十萬の住民に當ることとなつた（それに反して以前にはモスコーフスカヤ一縣に二百萬以上の住民があつた）、新らしい警察機關（警視）、等、等を創設した。この恐怖は、農民の動搖がそれ以來いづれの治世に於ても全然終熄するに至らず、エカテリナの後繼者達の各々がこれに關係しなければならなかつたことによつて支持せられた。パーウエルの即位直後には、その鎭定の爲めに大砲を有する軍隊の大部隊が送られねばならなかつた程の、激烈な動搖があつた。これが一部分パーウエルをして三日間の賦役勞働に關する勅令を發布せしめたのである。アレクサンドル一世が帝位に即いた、農民は再び動搖した、そしてアレクサンドルは自分の側近者達を（土地を附せざる農民の賣買禁止に贊成しなかつたところの）、此の如き數の人々の動搖は、力强きものとなつた時、危險なるものとなり得ると言つて嚇かした。再び『自由農民』に關する——地主達に農民を全村、土地を附して解放することを許した（以前には解放は個々にのみなすことを得た）所の——勅令が發布された。地主達はこの勅令を殆と利用しなかつた、——彼等は皇帝及びその宮廷よりも速にプガチョフの叛亂を忘却した。ニコライ一世の即位後再び動搖があつた、そして再び農奴に對する『キリスト教的態度』を地主達に命じたところの勅令が發布された。この治世には動搖は極めて頻繁に繰返された、一度は、四十年代に、ウイテブスカヤ縣に於て鐵砲、鎖、大鎌をもつて武裝され、ペテルブルグへ押寄せようとした農民が二〇、〇〇〇まで集合した。『義務農民』（前章參照）に關する自分の何の役にも立たぬ法律を發布する際に、ニコライは再びプガチョフの叛亂を想起せしめた。貴族階級は再び耳を藉さなかつた。セワストーポリ役の時には運動は殊に脅威的な性質をとつた。その者達から武裝軍隊が組成されたところの農民は、敵に向ふ代りに、警察署長と自分の主人達とを襲擊した。この運動が、アレクサンドル二世の即位と共に、農民問題が第一に揭げられた事實に非常に與つて力があつた。解放に着手しながら、アレクサンドル二世は何よりも農民の叛亂を恐れた。彼は、若しも農民が欺瞞を悟るなら、『解放』の外見の下に彼等を收奪したことを悟るなら、彼等は全大衆を擧げて立上がるであらうことを信じた。一部分彼の危惧は事實となつた、『自由』の公布に際して二、〇〇〇以上の農民暴動が各地に勃發した。プガチョフの叛亂以來これ以上重大なものは曾て無かつた、しかしプガチョフの叛亂に類する一つの全面的な叛亂には、これ等の暴動は成長しなかつた。『ロマノフ家』の帝國の軍隊的・警察的組織は今や十分に鞏固にして又十分に注意深かつた。

然らば總てこれらに農奴制國家に對して終局を置かんと欲してゐた革命的ブルヂョアジーは如何に

對したか？　彼女は恐怖した、殆ど皇帝達及び彼等の宮廷以上にさへ恐怖した。革命的ブルジョアジーの獨裁を打倒さんとする試みの全歴史は農民の小刄と斧に對するこの恐怖に貫かれてゐる。それは到る所このブルジョアジーの目の前にチラ付いた、そして彼女を最も決定的な瞬間に恐怖をもつて緊縛した。しかし一八六一年の動搖後ブルジョア革命性は全く氣息奄々として消え行きつゝある、されば このことの後それについては最早語ることを要しない。

十八世紀末にはブルジョア・インテリゲンチヤはロシヤには未だ少數であつた。彼等は共濟組合と當時ロシヤに唯一つであつたモスクワ大學の周圍とに集中されてゐた。共濟組合、それは――極めて貴族的な性質の、凡ゆる思ひ付きの儀式、形式及び宣誓によつて複雜化され、隨つて少數の者のみに近付き得る、嚴重にその團體のみに限られた（これ等の團體が『組合』と呼ばれた）、宗教的教理である。共濟組合員は信仰の差別を認めず、唯だ神の信仰のみを認め、ソロモンの宮殿の創建者達を自分達の始祖としてゐる。共濟組合の意義は、それが異つた信仰を抱ける人々、例へば、ユダヤ教徒とキリスト教徒とを相互に接觸せしめたこと、それが各國を結付ける商業資本にとつて極めて便利であつたこと、及び自分の秘密主義によつてそれが共濟組合に入り來たる富裕なる且つ教養ある人々を、當時深い考へなしに教會に出入してゐた未開の賤民から區別したことにあつた。秘密主義は商業資本主義の全精神に極めてよく調和してゐた（前章參照）。ロシヤに於てエカテリナ二世の時代に共濟組合の牛耳をとれる者はモスクワの出版・印刷業者ノオウイコフとモスクワ大學の教授シュワルツとであつた。君主獨裁に對してはモスクワの共濟組合員達は叛逆しようなどとは考へもしなかつた、それどころか、彼等は自分達の計畫を獨裁の力で實現し得ることを期待した、これが爲めにエカテリナの息子、パーウエルに近付いて、そしてこれを共濟組合に惹き入れることに成功した。その爲めに又エカテリナはノオウイコフを要塞に幽閉したのである（シュワルツは當時既に死んでゐた）。

全然ブルジョア革命家ではなかつたとは言へ、共濟組合は最後のものの爲めに二つの方向に於て道を準備した。第一に、共濟組合に於ては、宗教問題に關する自由な對話に耽んで（當時は他の信仰に對する正教の卓越を疑ふことすら既に重大なる犯罪であつた、が共濟組合員は全然信仰上の差別を認めなかつた）、自由な政治上の對話も行はれてゐた、そして第二に、共濟組合はその秘密主義の故に陰謀の爲めに極めて便宜な遮蔽であり、極めてよき學校であつた、十二月黨に屬した陰謀家の全部が共濟組合から出たのも偶然ではなく、また政府が、アレクサンドル一世が共濟組合を全く禁止するに至るまで、極度の猜疑をもつて共濟組合に對してゐたのも偶然ではない。しかし最初の、ロシヤに於けるブルジョア革命家と呼ぶことの出來るものは、共濟組合からは出なかつた、がそれは十八世紀のフランスの哲學者と政論家によつて育てられたところの生徒であつた。それは『ペテルブルグよりモスクワへの旅行』（一七九〇年）の著者、アレクサンドル・ニコラエヴッチ・ラヂーシチエフであつた。

總ての彼の『革命』は實にこの書物の出版に含まれてゐた。彼の周圍には小さな集團さへもなかつた、彼はまつたく一人であつた。裁判所は何人にもせよこれを『暴動せしむる』如何なる企圖も彼のところに發見し得なかつた。その生涯に於てそれは想像し得る限りに於ての最もおとなしい文學者であつた。監獄に收容された後、彼は痛く、彼が審問官に向つて『醜惡なる』又は『忌ふべき』と呼んだところの自分の書物を書いたことを後悔した。それにも拘らず、エカテリナは彼をシベリヤへ流した。何の爲めに？　『旅行記』の二箇所がそれを說明する。『貪婪なる獸、飽くなき蛭、何を我々は農民に殘してゐるか？　奪ふことのならぬもの――空氣である。然り空氣のみである。屢々彼から地の惠み――麥及び水のみでなく、又實に光をも奪つてゐる。法律は彼（農民）から生命を奪ふことを禁じてゐる。しかし瞬間的に（即ち一時的に）だけである。漸次に彼から生命を奪ふ幾何の手段があり得るか！　一方には――殆ど全能、他方には――擁護なき無力。何となれば農民に對する關係に於て地主は立法者であり、裁判官であり、自分の判決の執行者であり、そして自分の希望によつては――被告人が何事をも抗辯し得ざる原告であるからである。』

かくラヂーシチエフは農奴制度について、それが、吾々の知つてゐる如く、特に地主にとつて貴重であつた丁度その時に、書いたのである。既にそれを農奴制國家は忍ぶことが出來なかつた。しかしラヂーシチエフは小さな君主の前にとゞまつてはゐなかつた、彼は大きなものにまでも達した。『旅行記』よりも前に出版された小著に於て、既に彼は自分の讀者に向つて、『君主獨裁は人間的自然に最も反する狀態である』ことを說明した。『君主の不法は國民に、法律が彼（君主）に罪人に對して與へると同樣の權利を彼に對して與へる。君主は國民的社會の第一の市民である。』當時これはラヂーシチエフにとつて事無く過ぎた。『旅行記』に於ては彼は遙かに大膽にこの問題に觸れた。彼は自分の書物の一章に、恰も彼によつて書かれたのではないかのやうに、一九〇五年の革命まではロシヤに於てそれを印刷に附することが不可能であつたほどに書かれたところの、『自由に』なる詩を挿入した。この詩の內容は君主獨裁に對する武力的反抗が、『王冠を戴ける壓制者』なる皇帝の首を刎ねるに終る成功的の叛逆に獻げられてゐる。皇帝はそこでは『戰慄すべき怪物、』『極惡非道なるものの中の極惡人、』等、等と名付けられてゐる。この詩を讀んでエカテリナは『全く明かなる反逆者』たることを彼に認め、『クリミナルな（即ち犯罪的な）意圖』をそこに見出した。實際、皇帝についてはこれ以上露骨にロシヤに於てはニコライ二世の時まで語られたことがなかつた、唯だ、ラヂーシチエフの如く、外國に於てのみ書き得たのである。ところが彼は自分の書物をペテルブルグで出版したのである！

自分の著書の爲めに監獄に收容された後、ラヂーシチエフが訊問に際して全く英雄的でなかつたのを見て、吾々は驚いてはならぬ。勇氣を革命家に與へるのは、彼のうしろに、彼の背後に全國民が立つてゐるといふ自覺である。ラヂーシチエフは國民に訴へようなどとは考へもしなかつた、彼の著書

は極めて僅かな部數印刷され、その上それは吾々がその二三の引例を、解るやうにする爲めに、多少直さなければならなかつたほどに書かれてあつた。それは――インテリゲントがインテリゲンチヤの爲めに書いたのである。ラヂーシチエフの孤獨が、彼、即ち孤獨の文學者が怖ろしい君主獨裁と面と向つた時に、彼を捉へた精神の沮喪を、分に吾々に說明する。だがこの君主獨裁は、『旅行記』の著者から、その音が全一世紀間に亘つて聞こえてゐたほどの響き高い頰打ちを受けたのである。

農民運動との如何なる關係もロシヤの最初の共和主義者――最も正當にラヂーシチエフをさう呼ぶことが出來る――のところには無かつた。成程自分の『旅行記』の中で彼は同情をもつて農民達についての殘酷な地主の殺害について物語つてゐる、しかしそれが、彼のところに於て見出し得る、縱ひ遙かにプガチョフの叛亂を髣髴たらしむるものがあるとは言へ、總てである。その代りラヂーシチエフには他の方面に疑ふべからざる關係があつた、彼は經濟問題に至大の興味を有した、彼の職務が一部分しからしめたのであるが(彼はペテルブルグの稅關長であつた)。口供に於て彼は眞直に當時の經濟學書、特にフランスのそれが如何なる影響を彼に與へたかを述べてゐる。彼にはこの方面の彼自身の勞作、例へば、流謫中に、シベリヤに於て書かれた『支那貿易についての書簡』なる著書もある。こゝで彼はその當時にあつては新らしい、この書簡の後三十年を經てロシヤに實現されたところの、『保護政策』(第七章を參照)の必要についての思想を發表してゐる。『外國工業製品の防遏は必然的に國內工業を發展せしむる、――とラヂーシチエフは言つてゐる、――それなくしては內地產業は恐らくは衰微するであらう。』共和主義者ラヂーシチエフはかくて同時にロシヤに於ける工業資本主義の觀念の最初の告知者の一人であつた。

尙ほ一層強くこの同じ關係は、時代から言つて次ぎの『ブルジョア革命家』强制的な轉換についての一切の思想から一千露里も遠く離れて立つてゐたところの人間をさう呼ぶことが如何に不思議であらうとも、スペランスキイの所に感ぜられる。スペランスキイは、嘗てノオウイコフ及び彼の仲間が考へたやうに、獨裁的權力の手段を通じて、行動せんと考へた。彼はアレクサンドル一世の秘書であつた、そして彼の委託を受けてロシヤの國家組織の案を立てた。彼の解釋によれば、ロシヤは農奴制國家から、選擧權(有權者には唯だ土地所有者及び富商のみがなり得た)に基礎を置かれた憲法を有し、參事院及び衆議院の二院を有するブルジョア君主國にならねばならぬ。殆ど百年前に(彼の案は一八〇九年に係はる)彼は伯爵ウイツテが一九〇五年にロシヤに附與した所の憲法を前もつて失敬した。しかしウイツテの憲法は國民革命への讓步であつた、がスペランスキイの時代には如何なる革命も存しなかつた。スペランスキイの案をもつてアレクサンドルは唯だ貴族階級に阿諛せんと欲したが、最後のものが何よりも先づ賦役勞働を保存せんことを望み、すこしも憲法を必要としてゐないことが明かになつた時、アレクサンドルは案を引込めてしまつたばかりでなく、フランスとの同盟、隨つ

てイギリスとの分離の味方であつた事によつて貴族階級が我慢出來なかつたところのスペランスキイを追放した。吾々はフランスとの同盟及び大陸封鎖がロシヤの加工工業の發達に至大の刺戟を與へたことを知つてゐる、スペランスキイは再び工業資本主義の觀念の告知者の一人として現はれてゐる。工業の發達をば彼は國家的權力の主要なる任務の一つと考へた、主要なる國務省、スペランスキイの案によれば、內務省、の基礎的任務は、工業の發展についての配慮であつた。彼は個人的にも裕富なる資本家の團體に首を突込んでゐた、それは彼の第一の親友達であつた。所で革命家達とは彼は初めて、流謫から召還されて、新たに參事院の一議員となつた後に、彼が、ニコライ一世の委囑によつて十二月黨員の事件に關する告發狀を書いた時に、面と面とを突合はせた。

十二月黨員達のところに於ても吾々は農民運動との如何なる關聯をも見出さない、それどころか、吾々はかゝる運動の可能についての思想そのものが十二月黨員達を凝縮させ、彼等自身の運動を中止せしめたのを見るのである。十二月黨員は十分の九まで軍人であり、それも兵卒ではなく、士官であつた。軍人は嚴かに『祖國戰爭』と名付けられたところの一八一二年の戰爭以來、自分を祖國の救ひ手、ロシヤに於ける第一流の人々と感じてゐた。勝誇つた行軍をもつてパリーまで押し通り、到る所に於て戰敗の、柔順な、甘心を求めつゝある住民に出會つたところから、ロシヤの士官達は殆ど全ヨーロッパの主人をもつて任ずることに慣れてゐた。同時に、以前彼等が話に聞き書物を讀んでゐたところの（當時旅行をすることは唯だ富裕なる人々のみがなし得た）外國を見、ロシヤの秩序と異れるものを澤山見たところから、彼等はヨーロッパからそこへ出掛けた時よりも遙かに悧巧になつて歸つて來た。しかも、歸還後、これ等の人々が野蠻な、あまり讀み書きも出來ない兵士、アラクチエーエフの指揮の下に渡され、終日自分自身を又は自分の專ら嚙合ひの爲めに飼つて置く、一種の鬪爭用の動物の如き兵隊を無意味な兵營の訓練によつて苦しめることを餘儀なくされる。彼等の中の不良なる者のみが（『智の爲めの悲哀』大佐スカロズーブのやうに）新らしい秩序に適應することが出來た。より良き者は退職して軍務を退いた、が最も果敢なる者達はアラクチエーエフ主義を打破してロシヤを政治的にヨーロッパの一國となさんとする思想に到達した。軍人がこれを爲し得ることの保證としては近衛隊によりて實行された十八世紀のすべての皇室內の轉換、別してはパーウェルが正に士官達の陰謀の犧牲として殪れたところの一八〇一年の三月十一日があつた。その後尙ほ一層新らしい且つ尙一層確かな例が加つた、即ち同樣に軍隊によつて始められた、スペイン及びイタリーに於ける一列の革命である。

若しこれに、『祖國』戰爭當時すべての知識階級の青年が軍服を着てゐた事を加へるなら、吾々は何故に士官階級とインテリゲンチヤとが一八二〇年代に一つに溶け合つてゐたか、又何故にこのインテリゲンチヤのよりよき、最も果敢なる部分が革命的であつたかを理解し得るであらう。しかしロシヤ

をヨーロッパ風の國にする事は何を意味したか？　これが說明は當時ロシヤが經驗しつゝあつたところの、隨つて當時のインテリゲンチヤがその中に生きてゐたところの、その經濟的轉換が與へる。十二月黨員達は發達しつゝある工業資本主義とラヂーシチエフ、スペランスキイ以上に緊密に結付いてゐた。最も顯著なる（然も軍人に非ざる少數者の）陰謀家の一人であるツルゲーニエフ（有名なる文豪の遠い血緣）は、當時にあつては、注目に値する經濟學者であつた、租稅に關する彼の著書はロシヤ文學界に於ける最初のこの問題にマルクスも亦それによつて養はれて來たところの『古典』經濟學の觀念を適用せんとした試みであつた。ペテルブルグ結社の首領（吾々は直きに結社が二つ、一つはペテルブルグに、他はロシヤの南方にあつたことを見るであらう）、詩人ルイレーエフは、企業家・出版業者竝びにアメリカに於て、當時ロシヤに屬してゐたところのアラスカを搾取しつゝあつた、當時のロシヤに於ける最大の商工業的企業『ロシヤ・アメリカ商會』の事業經營者であつた。ルイレーエフはペテルブルグに於けるブルジョア團體と廣汎なる關係があつた。モスクワに於てはロシヤに於て初めて百科辭典を計畫した印刷出版業者セリワノフスキイが十二月黨員達に接近してゐた。十二月十四日の前日、密約者達によつて臨時革命政府（そこへは、因みに、スペランスキイも亦入る筈であつた）の一員に豫定されてゐたところの技師バテンコフは、『最も屢ゝ商人の家に出入した、そしてこの階級は一般に甚だしく商業を壓迫しつゝある規定に對して不滿足を表し、彼等との應對が變革の希望を起さしめたほどであつた。』若しもバテンコフの言葉を文字通りに解するならば、彼自身を商人團が變革に向つて慫かしたこととなる。恐らくさうではなかつたであらう、しかし吾々は矢張り憲法について論議した上述のペテルブルグ商業區の商人達を想起せねばならぬ。

『憲法、』即ち『國民的』代表の集會によつての皇帝の權力の制限は、農奴制度の撤廢と共に、十二月黨員の大多數を結合してゐたところの要求であつた。彼等の夢想してゐた憲法は、スペランスキイが立案したものと同樣、財產に基礎を置かれるもの、即ち國民的代表を送り得るものはすべてではなく、有產階級のみでなければならなかつた。この際地主は農奴に非ざる農民（國有地農民からは五〇〇人に對して一人の選擧資格者が豫定されてゐた）よりも五〇〇倍以上の投票數を受取るはずであつた、農奴農民は全然選擧權を與へられなかつた、彼等は『市民的自由、』即ち農奴的狀態よりの解放で滿足しなければならなかつた。この解放は十二月黨員達によりて殆ど一八六一年にそれが實行されたその形式に於て、農民から彼等の土地の一部を地主の爲めに取上げることを條件として、考へられてゐた、その際アレクサンドル二世の改良は農民に對して十二月黨員達よりも寬大ですらあつた、即ち彼等は農民からより多くの土地を取上げるつもりであつた。この點においてペテルブルグに居住してゐたところの、大部分裕福なる地主階級に屬し、近衞隊に勤め且つ特に革命的でもなかつた所の、それ等の陰謀の荷擔者達も一致した。最初の秘密結社、『サユーズ・スパセーニヤ』を彼等は解散せしめて、

殆ど公然と存在してゐたところの且つアレクサンドル一世によつての平和手段による改革を企圖する希望を失はなかつたところの『サユーズ・ブラゴデンストウイヤ』を創立した。嘗てその者自身が憲法を夢想し農奴制度に反對したことのあるのを思ひ出してゐた。アレクサンドルの書卓の上には『サユーズ・ブラゴデンストウイヤ』の規約が横たわつてゐた、しかし彼はそれに對して何等の手段も採らなかつた、彼はこれ等の、政治的自由を望みながら、しかも革命の決心を持たぬ、饒舌家達を可成の程度にまで輕蔑してゐた。

しかし南方の、所謂『現役軍』の間には、ペテルブルグの人々よりも遙かに斷然たる人々の小團體がひそんでゐた。これには一部分別箇の結社『ソエニジョンヌイフ・スラヰヤン』を組織してゐたところの富裕ならぬ士官達が屬してゐた。一部分それは秘密結社の最も教養ある且つ精力的な關係者達であつた、例へば、セルゲイ・ムラヴイヨフ・アポストルの如き、インテリゲンチヤの間の宣傳のみに限らずして、自分の兵卒達（彼は聯隊を指揮してゐた）の間に革命思想を擴めようとした唯一の人であつた。兵卒達の爲めに彼は特殊の『正教問答書』を編んだ、そこには神は決して坊主達が教へたやうに一切の抑壓者に絶對の服從をなすべく命じなかつた、『キリストは言つた、神と財寶とに仕ふるを得ず、ロシヤの國民及びロシヤの軍隊は皇帝に服從してゐる故にこそ苦しんでゐるのである。』『如何なる政治が神の律法に合致するか？　皇帝達の無き如きものである。神は我等すべてを平等なるものに創り給ふた、そして地上に降りて、使徒達を貴人と皇帝からでなく、庶民の間から選び給ふた。然らば、神は皇帝達を愛しないか？　否。彼等は國民の窘窮者として彼から呪はれてある、神は人間を愛する者である。』これを證明する爲めに舊約から、實際に、自分の爲めに皇帝を選んだ者達の言葉を神は聽かぬであらうといふことが語られてある引用がなされてゐる。『然らば、皇帝に宣誓することも神意に戻るか？　然り、神意に戻る。皇帝達は國民に强制的なる宣誓を彼の破滅の爲めに强いるのである。』

ムラヴイヨフ・アポストルが自分の兵卒達を憲法の名に於てではなく、共和政治の名に於ける叛逆に向つて準備しつゝあつたことは全く明かである、南方の密約者達は共和主義者であつた。彼等の首領、陰謀の最も顯著なる人物、大佐ペステリも亦さうであつた。彼は理解してゐた（一部分彼は直接それをポーランドの例に於て見ることが出來た。上記參照）、憲法は、その側に全國民大衆が立つに至らない限り、單にその背後に同じ君主獨裁が隱れる帷に過ぎぬであらうといふこと、また國民大衆、奴隷農民は十二月黨員の大多數の案が彼等に押付けようとしてゐたところのその半自由、半收奪をもつては誘ふことが出來ないであらうといふこと。最後の者達を憤激させない爲めに、ペステリは言葉の上では農奴制度の撤廢に對する地主への賠償に贊成した、しかしその代り全部の土地を、『ルスカヤ・ブラウダ』と彼によつて名付けられた、自分の案に於て、彼は國民に與へた。これによつて彼は新ら

しい秩序の側に、土地に興味を有する者を全部、即ちすべての農民と同様に農民の出である兵卒をも惹付けるべく希望してゐた。同時にペステリは最も斷然たる革命的闘爭とテロールなしには君主獨裁を顚覆し得ないことをよく知つてゐた、彼は常に大武裝的叛逆（彼は自分の側に一軍團、即ち四萬の兵力を持ち得ることを期待してゐた）を準備してゐた、それは全『ロマノフ家』を覆滅することに終らねばならなかつた。然る時、とペステリは思つた、事業は既に鞏固であるであらう。そして臨時革命政府は數年ならずして全ロシヤを改造し終るであらう。

ペステリの努力は、協調的な『サユーズ・ブラゴデンストウイヤ』をして眞の革命的秘密結社たらしめた。叛逆は一八二六年の夏、南方に於ける大演習を期として始められることに決定された。アレクサンドル一世の弑逆が合圖にならなければならなかつた。次いで叛逆軍隊はモスクワ及びペテルブルグに進出して、帝國の最高官廳――世俗的及び教會的――元老院竝びに宗務省をして臨時革命政府を召集せしめ、そしてその後それは舊組織の清算に着手しなければならなかつた。このプランは豫定された時よりも遙か前に粉碎した。ペステリの周圍には裏切者があつた、そして彼は一八二五年の十二月初めに捕縛された。それよりも尙ほ二週間前にアレクサンドル一世が死んだ、全く不意に死んだ――彼はまだ五十歳であつた。首領を失つた密約者達は全く新らしい情況に當面した。

しかし反對の陣營に於ても混亂は小さくなかつた。アレクサンドルの死は密約者達にとつてのみでなく彼自身にとつても、又皇帝の一族にとつても不意であつた。アレクサンドルには子供が無かつた、彼の後を繼ぐ者は當時ポーランドの大守であつたところのパーウエルの第二子、コンスタンチンでなければならなかつた。彼は、しかし、このことのあつた少し前に、彼が皇女と結婚してゐないで、普通の婦人、ポーランドの貴族の息女と結婚してゐたといふ口實の下に帝位を辭退した、がその實は彼の兄が彼をして辭退せしめたのである、それはコンスタンチンが自分の狂暴な、輕率な性質によつてあまりにも死んだ父親を思はしめ、隨つて彼の爲めに同じ運命が惧れられたからである。しかしコンスタンチンの辭退はまだ公布されずにあつた、――それは封印をされてモスクワのウスペンスキイ寺院に保存されてゐた。この事實を知つてゐた皇族以外のすべての者の眼には、コンスタンチンが皇太子であつた、アレクサンドルの死の報知が受取られた時、すべての者がコンスタンチンに皇帝として宣誓した。事件は第三子、ニコライ・パーヴロヰツチも亦、既に當時未來のニコライ・パルキンを約束してをり、しかも近衛隊が彼を我慢し得なかつたことによつて、一層複雜にされた。しかし、兎に角コンスタンチンの辭退のお蔭で、彼は皇太子となつた、火をいでて炭に飛込んだ譯である！

共謀者達は最初豫期せざる事件の續發に面喰はされたが、皇室にも彼等自身のところに於けると同樣の混亂があるのを見て、元氣づいた。今や既に大演習ではなく、ニコライに對する宣誓を利用することに決定された。兵卒達には、コンスタンチンは決して辭退したのではなく、彼がロシヤに憲法を

與へようと欲してゐる爲めに、帝位から退けられてゐるのだと語られた。ニコライによつて隱されてゐるところの、兵卒達の爲めに勤務年限を短縮し（當時は二十五箇年間の勤務であつた）、農民の爲めに自由を約したアレクサンドルの遺言書があるといふ噂が撒き散らされた。兵卒達は熱心にそれに耳を傾けた。謀叛者達のところには、しかし、この瞬間になつても事件をニコライと彼の側に殘つた軍隊とに對する武力的決戰にまで導くべき明確な確乎たる決意がなかつた。十二月十四日（宣誓の日）陰謀の指導者達は自分の兵士をビョートルの記念像の立つてゐる元老院廣場に進めた、そしてそこに方陣をつくつて、他の聯隊が彼等に合體するのを待つてゐた。その間に全ペテルブルグの平民が立上つた。國民の雲霞の如き大群が元老院廣場と附近の通路を一杯にした。ニコライ側の將軍に石や雪を投げ付け、肩章をもぎ取つた。ニコライが扈從と共に廣場に現はれた時、當時建築中であつたイサーキイ寺院の勞働者達が彼を薪で追拂つた、これはニコライ自身自分の日記の中に證據立ててゐるところである。それに對して謀叛者達がすこしも準備してゐなかつたところのものが、すなはち國民革命が始まつた。

然るに元老院廣場の方陣には、指揮をする者さへもゐなかつた。ルイレーエフは二三分顏を見せた。しかし直ぐと家へ歸つてしまつた。それは彼に許さるべきであつた、彼は惡しき軍人であつたし（退職の下級士官）、その上この日頃病氣であつた。しかし共謀者達によつて專門の『統裁官』として、近衞聯隊長公爵トウルベツコイが任命されてあつた、――この者は全く廣場に姿を見せないで、親戚の家に隱れてゐた。ニコライ・パルキン自身も、實は少からず惑亂してゐた、しかし彼の扈從の中には經驗に富んだ、戰鬪的な、逆上してしまはなかつた將軍達がゐた。廣場に砲兵隊と騎兵隊とがつれて來られた、それは謀叛者達のところには無いものであつた。騎兵の攻擊を退けた時（十二月黨員達ではなく、先の勞働者達が自分の薪をもつて）、砲兵隊が方陣と周圍の民衆を目がけて葡萄彈を打ち放した。數分時にしてすべてが終つた。

次いで大衆の捕縛が始まつた。武裝的叛逆の鎭壓に成功した後再び元氣を取り戻したニコライは、自から事件の審理を指揮して、憲兵的能力を大いに發揮した。第一回の訊問に於て彼は夥しい連類者の名簿と陰謀の詳細とを、失敗の後一層意氣沮喪した關係者達から引出してしまつた。巧に彼等に、すべてはつまらぬことに終るであらう、最も罪の重いものでも免職をされるか自分の村へ蟄居させられる位であらうといふ希望を持たせながら。

が全てが明かになつた時、最も無慙な極刑が課せられた、陰謀の五人の首領達、ペステリ、ルイレーエフ、セルゲイ・ムラヴイヨフ・アポストル、南方に於て叛亂を起さうとして失敗したペストウジエフ・リユーミン及びカホーフスキイは絞殺された（それらニコライの『御慈悲』であつた、裁判は最初彼等を四裂の刑に宣告した）。數百人以上が、多くは懲役に、殘りの者は移民として、シベリヤに

流された。バテンコフは二〇年間ペトロパウロフスク要塞監獄に坐り通した、それは、勿論、如何なる懲役よりも惡かつた。運動に荷擔した數千の兵卒はカフカズに送られた、そこで山人達の彈丸でないとすれば、疫病の爲めに、殆ど全滅した。

何故に十二月黨員はかくも無慙に敗北したか？　最初彼等はニコライよりも遙かに優勢であつた、この者のところには一旅團の歩兵しかなかつた。騎兵隊及び砲兵隊は非常に嫌々彼の命令に從つた。騎兵隊は最小の抵抗に際しても退却した、砲兵隊は長いこと彈藥を發見し得なかつた。彼の側にあつた唯一の有名な將軍、『祖國』戰爭の英雄ミロラードヰッチは、眞先に（カホースキイによつて）殺された、その他の將軍達を兵卒達はニコライと同樣に憎んでゐた。何故に十二月黨員はすべてこれを利用しなかつたか？　答は彼等自身が與へた、彼等は彼等の眼前に於て始まつたところの全國民的叛逆を恐れてゐた。『ロシヤに於ては共和政治は不可能である、――と十二月黨員シュラインゲリが、ルイレーエフに言つた、――この意圖をもつての革命も亦滅びるであらう、モスクワだけにも（シュテインゲリはモスクワの工業的ブルジョアジーに非常に近接であつた）小双を取上げんとしてゐる奴僕の群が九百人ある、そして最初の犧牲は我々の祖母、伯母、姉妹であるであらう。』元老院廣場に於てニコライが自分の葡萄彈をもつて十二月黨員を破つたといふよりも、寧ろプガチョフ叛亂の亡靈が彼等を破つたのである。この亡靈に對する恐怖が最も決定的な瞬間に彼等の手を緊縛して永久にロシヤに於けるブルジョア革命を亡ぼしたのである。

實際、一八二五年の十二月十四日はロシヤのブルジョアジーの最初にして最後の革命的進出であつた。憲法について夢想することをブルジョアジーは決して止めはしなかつた、しかしその期待を彼女は專ら皇帝のお慈悲に懸けてゐた。彼女は皇帝達に特に（アレクサンドル二世に）憲法に關して一度ならず歎願書を提出した、しかも彼女が社會主義者達の側からの革命の企圖を目擊した時、彼女は恐怖をもつてこれ等の煽動者達から後退りして、そして『煽動』との鬪爭の爲めの自分の勞力を提供しながら、皇帝達に自分達の忠誠を披瀝し始めた。ロシヤに於けるブルジョア思想の最も顯著なる代表者の一人である教授カヴェリンの書いたところのものが、ブルジョアジーの爲めに信仰のシンボルとなつた、『ロシヤに於ける至上權のあらゆる制限は、彼女自身（即ちロシヤに非ずして、權力）より發する所のものを除きては、全く不可能であるであらう、そしてそれは、幻想または自己催眠と同樣、斷然有害である。』

何故にさうであつたか？　單に、ロシヤ勞働黨の最初の宣言に書かれたやうに、ブルジョアジーが、ヨーロッパの東へ行けば行くほど、より醜惡にしてより臆病なるが故か？　勿論、ブルジョアジーのこの醜惡にもそれだけの『物質的根據』がある。工業資本主義にはその組織時代にプロレタリアートが必要であり、即ち土地を持たぬ農民階級が必要であり、『國內工業の保護』即ちその一切の重荷

が國民大衆の上に落ちかゝつて來るところの高い關税が必要であり、最後に、外國市場、即ち『スタムブールとテーランとを震撼しつゝある』運命の手が必要である。がすべてこれが爲めには強力なる中央集權、君主政體が必要である。が若しも尙ほ、吾々のところでは工業資本が嘗て單獨で統制したることなく（例へば、十九世紀に於てイギリス及びアメリカ合衆國にあつた如く）、常に商業資本と山分けしなければならなかつたこと、――が夫故に君主政體のみならず、正に君主獨裁も亦必要であつたのである、――を想ひ合はせるならば、ロシヤ・ブルジョアジーの政治的怯懦は理解以上に明かとなるであらう。

昭和四年六月八日印刷
昭和四年六月十四日發行

ロシヤ社會史 (1)

（定價金壹圓）

譯者　外村史郎
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行者　足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所　叢文閣
振替東京四二八八九番
電話牛込二五七三番

印刷所　東京市神田區表神保町十番地
文成社印刷所
前田宗松

プレハーノフ選集

外村史郎譯　わが批判者の批判　定價壹圓五拾錢　送料十二錢

藏原惟人譯　チエルヌイシエフスキイ（一）　定價壹圓五拾錢　送料十錢

丸目利一譯　チエラヌイシエフスキイ（二）（近刊）

竹尾弍譯　われ等の對立（近刊）

マルクス主義藝術理論叢書

プレハーノフ著　外村史郎譯　藝術論　定價六十錢　送料六錢

プレハーノフ著　藏原惟人譯　階級社會の藝術　定價壹圓　送料八錢

ルナチャルスキイ著　外村史郎譯　藝術の社會的基礎　定價壹圓　送料八錢

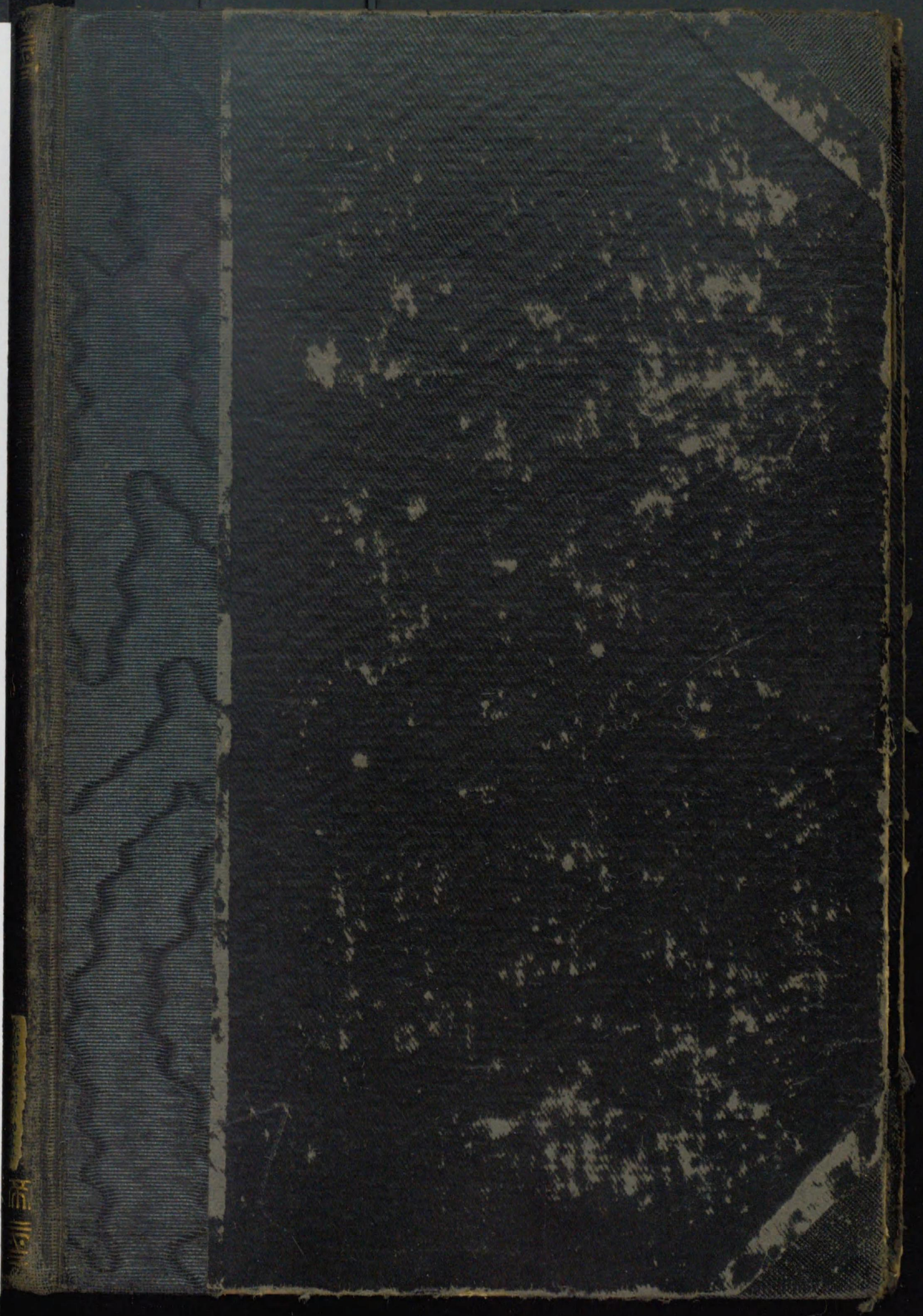
メーリング著　川口浩譯　世界文學と無產階級　定價九十錢　送料六錢

マーツア著　藏原・杉本共譯　現代歐洲の藝術　定價壹圓　送料八錢

1
59

59
1

599
10



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black